
レムリア・オンライン

fuou

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

レムリア・オンライン

【Nコード】

N1595T

【作者名】

f u o u

【あらすじ】

不条理な死に方をした主人公が、お詫びとして、直前までやっていたネットゲームの世界に行くことに……

基本、主人公は最強です。

最強な主人公が、のんびりと異世界ライフをおくる話……になったらしいな。（作者は初心者です）

TS（男↓女）ものです。嫌いな人は、そのまま戻ってください。

第1話 終わり（前書き）

初投稿です。

作者は初心者ゆえに、読みにくいところもあるかもしれませんが。そのへんは、ご容赦ください。

なお、誤字・脱字・矛盾点などがありましたら、ご報告ください。

第1話 終わり

2XXX年、一つのMMORPGの幕が降りようとしていた。

5年前、あるゲーム会社が鳴り物入りで発表、開始したゲーム『レムリア・オンライン』――MMORPGの中で、最も有名で、おしまれたゲームである。

まず、開始の時期が悪かった。開始の半年後、バーチャル・リアリティー・システムが開発され、その一ヶ月後には、そのシステムを使ったVRMMORPGの開発が発表される。

VRにより、プレイヤー自体がリアルに冒険が感じられるのに比べ、従来の画面上だけの冒険であるゲームでは太刀打ちできるはずもなく、多くのゲームがサービスを終了、VRに移行していった。

そんな中、『レムリア・オンライン』はVR化の波に乗ることを嫌い、従来のままで魅力的なゲームを作ろうと、必死の努力をしていた。その甲斐あってか、ある一定数のユーザーを獲得し、つなぎとめておくことには成功した。

しかし、開始から2年。次々と出てくるVRゲームに、新規ユーザーを取られ、今までいたユーザーたちも引退するなど、どんどん人数が減っていった。

そして、開始から5年。『レムリア・オンライン』は、静かに幕を下ろした。

『あと1時間でレムリア・オンラインは終了いたします。長い間ありがとうございました』

そう、テロップが流れている中、僕の操るキャラクター『ビリノア』は、ある場所へと向かっていた。

僕の名前は、^{なつかきはじめ}榊元。職業はネットトレーダー……今は休業（一生食っていける額を稼いだので）している。

そして、『ビリノア』は、僕が『レムリア・オンライン』で使っ

ているキャラクターで、性別は男、種族は人間、レベルは200（最高）、職業は魔術師（今は）である。

レベル200のところで気付かれた方がいるかもしれないが、僕はいわゆる廃プレイヤーと言うやつで、かなりのお金をつぎ込んでいる。職業に関しても、今はと付けた通り、全職業を経験し、そのスキルをマスターしている。

さて、僕が今どこへ向かっているかと言うと、世界の中心にある、レムリア島のレムリア神殿である。そこで、最後の転生を行うためだ。

レムリア・オンラインに置いて転生とは、（個人的に）重要な要素のスキルをそのまま引き継ぎ、レベル・職業・ステータスを初期化することだ。

職業。これは、戦士・魔術師・弓使い・神官の戦闘系4種と、鍛冶師・錬金術師・詩人の生産系（最後のは疑問だが）3種の計7種だ。上位職と言うものはない。ついでに、種族は、人間・エルフ・ドワーフ・獣人・魔人・神人の6種だ。

ステータスは、ほとんど無いと言ってもいいほどだ。すなわち、HP（ヒットポイント）とTP（テクニカルポイント）だけである。他のゲームのように腕力や知力と言うものはない。それゆえに、魔術師が大剣を持って敵を切り倒すという風景が見られた。武器のレベル制限があるだけだから見られる風景だった。

では、レベルはと言うと、まあ解りきった事だが、職業によって上がり幅が違うが上げればHPとTPが上がり、スキルポイントが2ポイント手に入る。

さて、個人的に重要だと思うスキルの説明に移ろう。まず、スキルは基本スキルと職業スキルに分かれている。基本スキルとは、冒険者として必要なスキルであり、全職業共通のスキルである。職業スキルは、名前のとおり、職業によって異なるスキルだ。

基本スキルは、鍵開け、罠解除、ダッシュ、モンスター知識、料理、採集、採掘の7種だ。初回ゲーム開始時に10ポイント貰えるスキ

ルポイントが振り分けられるスキルである。マスターレベルは5であり、比較的すぐにマスターできる。

問題は、職業スキルだ。生産系はまだ少ない方だが、戦闘系はかなり多数のスキルが存在する。例として、戦士を挙げよう。まず、剣の威力を上げる剣スキル、同じような効果を持つ槍スキル、格闘スキル。防具の効果を上上げる壁スキル。技を繰り出すためのスキルなど、かなりの量となる。

剣をふるうことは、剣スキルを持っていなくても出来るのだが、マスターレベルでもっていれば、その威力は2倍に跳ね上がる。この効果は、他の剣系の技スキルにも適用されるため、剣士系なら必ずマスターまで取ることをお勧めする。

1回ですべてをマスターすることは不可能であり、少ない方の生産系でさえ最高レベルまで上げても全てのスキルをマスターできないのだ。その為、剣なら剣系、槍なら槍系などと、系統別にマスターしていく方法を取るのが一般的だ。

だが、僕個人は違う。全ての職業スキルをマスターしたいと考えていた。その為に目を付けたのが、転生システムである。

もともとは、その職業に飽きた人が別の職業に変わるため、種族を変えたいと思った人が利用するシステムとして想定していた。だが、スキルやアイテム、お金は持ち越せるものの、レベルが1まで下がることを考えると、わざわざ弱くなってまで変える必要性を感じる人は少なく、あまり使われないシステムとなっていた。

そもそも、僕が目指していたのは魔法剣士だった。遠ければ魔法、近ければ剣といった風な戦い方がしかなかったのだ。転生システムを使うことは決めていたが、まず戦士になってスキルを取ろうとした時、まずその量に驚いた。多いのだ、他のゲームに比べて、圧倒的に。そして思った。スキルコンプリートしたい。その時から、僕は廃プレイヤーになった。親もおらず、ネットトレードでひと財産稼いでいたということもあり、廃プレイにはもってこいの環境だった。

ゲームを始めて3年。かなりの額のお金をかけつつ、全てのスキルをマスターし、スキルマスターの称号を得た。しかし、その時には、レムリア・オンラインは衰退しており、プレイヤーの数も激減していた。

人が減っても、やることは変わらない、メインシナリオをやったり、サブをやったり、運営が用意したイベントをやったりと楽しんだ。VRに興味はあったが、こちらの方に愛着があった。いまだにこっちにいる人たちの、共通の思いだろう。

しかし、時代の流れに逆らえないのか、今日、この日にレムリア・オンラインは終了の運びとなった。

最後に運営側が用意した祭りを楽しんだ後、仲間たちと別れ、レムリア神殿に向かった。

最後にやりたい転生。それは、ランダム転生と言うものだ。元来転生は、プレイヤーが決めた種族、職業に転生できるのだが、ランダム転生は、その名のとおり名前だけ固定で、他はランダムで決められる。性別すら例外でない。知り合いのチャレンジャーがやった事があるが、ドワーフの女、職業詩人になった。もちろん男が、だ。恐ろしく、当たり外れの落差は大きいが、どうせ最後だからと思い、実行することにした。

『ようこそ、わが神域へ』

神殿に入ると同時に、『創造神・レムリア』が、話しかけてくる。『今回は、何を望む？』

いくつかある選択肢の中から、『転生をしに来た』を選ぶ。

『転生か……どのような転生を望む？』

迷わず、『ランダム転生』を選ぶ。

『ランダム転生だな。これで良いのか？』

この選択肢でハイを選んだ……

昨日未明、自宅兼仕事場で、ネットトレーダーの榎元さん（25歳）が、倒れているのを近所の人が発見、通報したが、既に息がな

く、病院にて死亡が確認された。目立った外傷はなく、警察は病死の可能性が高いとしている。

(2XXX年。月×日 新聞の地方欄より抜粋)

第1話 終わり（後書き）

いかがでしたでしょうか。

作者の自己満足で作っている小説なので、稚拙な感じがありますが、少しでも面白いと思ってくれるといいのですが……

作者は、執筆速度が遅いので亀更新、もしくは不定期になるかもしれません、完結までは持っていく予定です。

感想がありましたら送ってください。

それでは、読んでいただきありがとうございました。

第2話 現状確認（1）（前書き）

お気に入り登録してくれた方、ありがとうございます。

第2話 現状確認（1）

心地よい風と、光を浴びて、僕の意識は戻ってきた。

目の前に広がるのは、どこまでも青い空。体の下にある草は柔らかく、心地よい感覚を与えてくれる。

気を失う前に感じた、胸―心臓をわしづかみにされるような感覚はなく、とても心地よい気持ちだ。

「……へっ？」

確か僕は、自分の部屋にいたはずだ。そこで倒れたのなら、目覚めるのは病院、少なくとも自宅の自室であるはず。外で寝ているなんてことはないはずだ。

「夢……では無いみたいだな」

体の下敷きになっっている草を感じてそう判断し、起き上がる。

「これも現実か……」

実は、起きた時から感じていた体の違和感。背中の中と、声の変化。自分の胸についていて揺れる塊。そしてあるべきはずの物の消失。そこから導き出される一つの結論。

「どう言うことだ？ これは……」

翼はともかく、自分が女になったということだ。

改めて自分の格好を確かめる。

「黄色のTシャツと赤いスカート。足元はサンダル？」

どう考えても、ちよつと出かける服装で、こんな草原の真ただ中にいるものではない。あと、感触から、下着はきっちりついていようだ。

「羽は本物か……」

白い翼を触ると、触られた感じがある。自分の意思で動かすこともできた。根元まで触ってみたところ、服に穴を開けているわけでもないのに、服を突き抜けているようだった。

「銀色」

髪の色だ。普通に短かった髪が、背中の真ん中あたりまで伸びていた。さらさらとして心地いい感触。

「顔は、よくわからないな」

鏡がないのでよくわからないが、たぶん女の子の顔だろう。僕の顔のままだったら怖い。体の方は確かめない。彼女いない歴〃年齢と言っひきこもり人間には、刺激が強すぎる。

「♪♪♪♪♪」

現状確認をしているところに、聞きなれた音楽が流れる。

「これは……」

レムリア・オンラインでGMメールの設定音だ。

「メール？　なんでこの音楽が？　メニューを開け……」

言葉が止まる。目の前にメニューが表示されたのだ。その隣にステータス。下にはアイテム欄まで見える。

「なんだ……これは……」

恐る恐るメニューに手を伸ばし、点滅しているメールを触ってみると、すぐに反応しメール画面が浮かび上がる。

「なんだこれ？」

メールの内容を見て、さらに疑問が膨らむ。

『榊元さま

あなたは今混乱していると思います。その混乱を収めたいと思っているなら、私のところまで来てください。

私は、ホームで待っています』

「ホーム？　ホームって……」

状況はよくわからないが、ホームの心当たりはある。

先ほど出て、今も目の前にあるメニューの中にある、ホームのことだろう。つまり、レムリア・オンラインで一人一人が貰える、個人空間のことだろう。

「それならここは、レムリア・オンラインなのか？」

VR化するという話は聞いたことがない。いや、運営側が、VR化をことん嫌っていた。方針が変わったとしても、ここまですぐ出来るはずがない。

「考えても仕方ないか」

思考をさえぎるように呟き、メニューに手を伸ばす。

「さーて、鬼が出るか蛇が出るか」

困惑しながらも、なぜかわくわくしてホームのボタンを押す。すると、すぐに目の前の景色がぶれ、真っ白な空間が広がった。

「なっ」

レムリア・オンラインなら、ここにはかなり金をかけた家になっているはずだ。なのに真っ白って……

「……メニュー、うっとうしい」

右を見ても左を見ても、正面にメニューが表示され、視界を遮るのだ。

「消えるよう念じれば消えますよ」

不意に横から聞こえた、聞き覚えのある声のアドバイス。声のする方を見ようとしたが、メニューが邪魔になることに気づき、アドバイス通り消えると念じてみる。

「おお。消えた」

「言ったとおりでしょう」

改めて声のする方を見る。

「はじめまして、で良いのでしょうか？」

ウェーブの掛かった長い黒髪、夜の空を思わせる深い黒の瞳、無邪気な笑みを浮かべた、三対の翼をもつ少女。ゲーム内で何回も見たその姿が、映像でなく、実体としてそこにあった。

「女神レムリア……」

「ようこそこちらに、榊元……いや、ビリノアさん」

「あなたがいるってことは、ここは……」

「はい。貴女の予想どおりです。私の名前の付いた世界、レムリアです」

ゲームの世界に引きずり込まれた、というところだろうと予想していたが、予想通りだった。僕のことを『ビリノア』と呼んだことから確信できる。

「正確には少し違います」

レムリアの説明によると、ここはレムリア・オンラインと地形や国家、種族等は同じだが、時代や、細かいところで違うらしい。

「いまは、レムリア歴563年です」

「ゲームでは、310年だから、約250年後ってことか」

メインシナリオであった、邪神復活もすでに阻止しているらしい。「問題がないわけではありませんが、おおむね平和であると言っていいでしょう」

「世界については理解した。じゃあ、なぜ僕はここにいるんだ？しかも性別も変わっているし……」

「それについては、私よりも適任がいます」

そう言って、レムリアはなにもない空間に手を突っ込む。しばらく探っていたが、やがて空間から一人の人物を引っ張り出す。

「なにをするの、レムリア姉」

引っ張り出されたのは、金髪碧眼のツインテール少女だった。どことなく猫を思わせる雰囲気を持っている。

「なにじゃないでしょ。説明すると言ったのは、あなた自身でしょうが」

「うえ、もう来てるの？」

「目の前にいるでしょうが」

女子二人の間に入っていく勇氣はない。彼女いない歴〃年齢をなめんな。

「うあ、ごめんなさい」

「謝らなくていいから、説明を頼む」

「うん。まずあたしのことから話すね」

少女の名前は、和泉^{いずみ}。地球の管理者だと言う。

「管理者？」

「そう。地球で起こる出来事を管理するのが仕事。いわゆる神に近いけど、よっぽどのがない限り手を出さないの」

今回はそのよっぽどのが起きたから、手を出したらしい。

「名前を書いたら、書かれた人が死んじゃうノートの話、聞いたことない？」

「あるけど……それが……」

「それが現実にあるとしたら？」

「は？」

あるわけがない。あれは漫画であって、フィクションだ。現実ではなく、非現実……

「うん、あるはずがないの。本来ならば」

和泉の説明によると、人間の想像力は凄まじらしく、どんなことでも起こしうる可能性があるらしい。その気になれば、なんでも出来るらしいのだ。

なら、なぜそれが出来ないのか？ 理由は簡単。人間は、常識と言うものに縛られており、出来ないと思い込んでいるから発揮されないだけであるという。

「時々それを軽々と破る人がいてね。よりも寄って、そのノートを出しちゃったんだ」

「世界のバランスを壊しかねない物の存在を、許すわけにはいきません。だから、管理者が動きました」

「一足遅く、使われた後だった……ってわけだ……」

どうやら有名な、死んでもそう大して問題になりそうにない奴、として僕が選ばれたらしい。雑誌の取材なんか受けるんじゃないかな。たよ。

「自分と同じくらいなのに、お金持っていうのもあったみたいだよ。ひがみか。ひがみで殺されたのか。」

「ノートは破棄して、本人は念入りに処置しました」

「だけど、殺されてしまった、君をどうするかが問題になったの」

「？ 元の世界に生き返らせてくれないのか？」

「和泉の管理している世界は、完成に近い世界で非常にぎりぎりですが、バランスが取れています」

「そこに、死んだ人間をよみがえらせるといふ矛盾を入れちゃうと

……」

「バランスを崩して、元の木阿弥っていうことが……」

「言い方は悪いですが、一人のために多数が犠牲になるより、一人が犠牲になった方がましということですよ」

「……本当に悪いですね」

「「ごめん（なさい）」」

管理者の二人が、口々に謝る。

「その為、貴女に用意された道は……」

「異世界転生」

第2話 現状確認(1) (後書き)

書いていくうちに長くなりすぎたので、切りがよさそうなところまでにしました。

なるべく早く次話を投稿します。

誤字、脱字、修正点などがあれば指摘ください。

第3話 現状確認(2) (前書き)

毎日投稿出来る人って、どれだけの勢いで書いているんだろう……

第3話 現状確認(2)

確かに僕は、ネットゲー廃人だったし、半ひきこもりだった。それは認めよう。認めるけれど、異世界に行つて暴れようとかは、考えてなかった。やってみたいことはあつたけど、それはこちらでも出来ることであり、現状で満足していた。

「輪廻に入れると記憶が消えます」

「生き返らせることは出来ないし」

「話し合いの結果、余裕のある世界に送る方がいいと結論が出ました」

「だから、直前までやっていたゲームとそっくりな世界に送つたの。ついでにゲームのキャラクターの能力と持ち物もサービスしたんだよ」

「体の方は、私が作りました。久々の会心の出来です」

「いやいや、僕の持ちキャラ『ビリノア』は、男の子ですから。女の子になつた覚えはないですから。」

そう訴えると、和泉は首をかしげ、レムリアは和泉を驚いたように見つめる。

「和泉……貴女が持ち込んだ資料をもとにして、容姿などを決めたのですけど……」

「え？ でもゲームのキャラクターは……」

急いで、ステータス画面を開ける。

『名前 ビリノア・バクスター 種族 神人
年齢 14 性別 女 職業 鍛冶師レベル1(+57)』

名前以外の全てが、記憶にあるものと違う。種族は人間で、20才、魔術師レベル200(+56)だったはずだ。ちなみにカッコ内の数字は、転生した回数……

「！ ランダム転生か！」

レベルと（+57）を見て、死の直前、自分のやっていたことを思い出す。最後だからと言って、ギャンブルのような感覚で選んだあの選択。

「そうですか…… そんなことを……」

「ごめんなさい。確認しなかった、あたしも悪いよね」

こんなことになるなら、選ばなければよかったという思いもよぎったが、あの時点ではこんなこと、予測不能だったことも気付く。

「うあ、誰にも文句言えね」

ノートを使った
文句を言いたい奴はいるが、ここにはいないし……

ゲーム画面だけを見て、和泉が女の子のキャラを使っていると思いついたのも、資料だけを見て、レムリアが体を作ったのも、悪気があったわけではないのだ。

「男の体に入れ替え……」

「無理ですね」

提案に対して、一瞬で否定の言葉が返ってくる。

なんでも、すでに僕の魂は、この体に定着しているとのことだ。

定着した魂を無理矢理はがすと、魂に傷がつき、悪影響が出るらしい。

「最悪の結果は魂の死だよ。魂が死んじゃうと、生まれ変わることも出来なくなるんだよ」

なお、傷つけずに魂を取り出す方法は、その人が死ぬしか方法はないらしい。それも自殺じゃ駄目だとのこと。まあ、生き返れたのに死ぬつもりはさらさらないが。

もう一つ提案があったので、そっちを訊いてみることにする。

「体を男の体にする……」

最後まで言い切ることは、出来なかった。理由は簡単。目の前にいたレムリアさんの笑みが、より深くなった……ただそれだけである。

「私の最高傑作を、作りかえろ……と？」

ただの笑顔。なのに、そこから感じられるけた外れのプレッシャー。レムリアさんの隣にいたはずの和泉が、いつの間にか少し離れ、ふるえているのが確認できた。

「和泉からの資料をもとに、私の持つすべてを詰め込んだ最高傑作が、気に入らないと……」

「いや、申し訳ないです。うれしいです。ありがたく使わせてもらいます」

あまりの迫力と恐怖に、思わず土下座してそう言葉を返してしまっただ。

「そう、それは良かったです」

レムリアさんの笑顔が、柔らかいのに戻っているのを確認して、ほっと息をつく。ふと視線をそらすと、和泉も同じように胸をなでおろして、息をついているのが目に入った。

『だめだよ。レムリア姉を怒らせたら』
今代最強の管理者

僕にだけ聞こえるような声で、和泉が忠告をくれた。出来ればもっと早く言ってほしかったよ。と言うか、なし崩し的に僕は女の子のままが決定事項になっている。

「……仕方ないか」

少し考え、諦めることにした。人生諦めと言うか、引き際が肝心。デイトレードも、生活も、限界ぎりぎりではなく、余力を残しておく方が上手くいく。そのスタンスでやって上手くやってきたのだから、今回も上手くいくはずだ。女の子になるうが、僕は僕。せつかく生きていけるのだから、楽しまないとね。

「考えは、まとまりましたか？」

開き直り気味の僕は、レムリアさんの言葉に、うなづくことで答えた。

少し考えたようですけど、素直にうなずいたビリノアさんを見て、私は多少驚きを感じました。隣の和泉も同じく驚いたように見えます。

長く管理官の仕事をやっていると、今回と同じような案件が出てきます。今回は特殊で、間違えて女の子にしまったのですが、人を異世界に送るということは過去何回もありました。

高年齢のほとんどの人は、異世界行きを断ってきます。しかし、低年齢層、特に十代後半から二十代前半の人は、行きたがりです。その際、こちらに非があることをいいことに、代償として、漫画・アニメ・ゲーム等の技を使えるようにしろ、魔法のある世界なら魔力を最大にしろ、等々己の欲望に忠実な願いを言うてくる人が多いのです。

出来るだけ、その願いをかなえてあげるのが、そう言ってきた人たちのほとんどは、貰った力をうまく扱えず自滅しています。また、数少ない、使いこなせている人も、大半が世界の崩壊レベルの事件を引き起こして、私たち管理官が干渉しなければならなくなったりしています。そんなことをしてしまった人がどうなるかは、想像している通りです。

それと比べますと、ビリノアさんは、同じくらいの年代とは思えないほど落ち着いているように思います。

自分が知らないところにいて、しかも姿かたちまで変わっているというのに、パニックに陥らず、落ち着いて現状確認をしていた所からも、うかがえます。

こちらの非に対しても、特に代償を求めることもないようです。物欲が少ないのでしょうか？ それとも他に何か考えがあるのでしょうか？

諦めて、前に進むために必要な事を考えよう。

「いくつか聞きたいことがあるんだが……」

こちらをじつと見て来る二人に疑問を投げかける。

「え？ はい、なにがきたいのですか？」

何か考え事をしていたのか、レムリアさんは、あわてて答える。

「レムリア姉、あたしはそろそろ戻るよ」

僕が、質問するより先に、自分の役目は終わったのだらうと判断してか、和泉がそう切り出した。

「そうね、後はこちらでの生活についてだけですから、もう良いですよ」

「ん、レムリア姉、また連絡するね。ビリノアさん、もう会うことはないかもしれないけど、元気だね」

「あ、ちよつと待った」

聞きたいことがあったので、帰ろうとする和泉を呼び止める。

「僕の財産のことなんだけど……」

「ん？ 大丈夫だよ。君の望んだとおりになるよう手配したから」
望んだとおり……それは、持ち物等を全て整理し、そのお金を弱者援助に充てること。僕自身も孤児であり、つらい目にあった事も一回や二回じゃない。微々たるものかもしれないし、偽善かもしれないが、これで少しは楽になってくれればいいなと思う。

「後は良い？ それじゃ」

そう言い残し、和泉は一瞬にしてこの場から消え去った。

「それでは、説明を始めましょうか。まずは……」

第3話 現状確認(2) (後書き)

ざっくりとしていますが、ヒロイン(笑)のビリノアくんがここに
来た説明でした。

次回は、能力の説明に入ります。

誤字、脱字、修正点、感想などをどしどしお寄せください。

第4話 現状確認(3) (前書き)

ビリノアくんは、石橋をたたいて渡るタイプですが、ちょっと抜けています。

第4話 現状確認(3)

「まず、なにが出来るか確認しないとな……」

一通り、レムリアさんから説明を受け、レムリアさんを送りだしたところ、画面で見ていたままのホームの居間に僕は立っていた。自分の作った物が、実体を持ってここに存在しているということがうれしくなり、全ての部屋を見て回った後のことである。

本当に何をしようか？

「よし、決めた」

まずは、職業である鍛冶師の能力が使えるか試そう。

そう思い立ち、作業着に着替え、鍛冶場の方に向かう。

向かう途中で、レムリアさんから聞いたことが頭に思い浮かぶ。

「まず、ゲームとの違いは、スキルと言う物がないことです」

「スキルが……ない？」

「はい、セットすれば使えると言う、簡単なものではありません」

スキルがないとすれば、自分が苦労したあの時間は何だったんだとビリノアは思った。

「その為、スキルを経験として、貴女の頭と体に覚えこませてあります」

「え？」

「こちらで勝手に取捨択一はさせてもらいましたが、問題はないはずですよ」

鍛冶場に入るとまず目につくのが、炉だ。最新式の温度調節機能付きの火晶石式だ。

鍛冶場とともに、課金アイテムとして買ったものだ。これにより、わざわざ込み合っていた公営の鍛冶場で作業しなくても済むようになったのだ。

まずは剣でも作ろうかな。そう思い、材料が置いてある棚に向かう。

「鉄は……あるな」

大量の鉄があるのを確認する。ついでにほかに何があるかを、確認する。

「黒石鋼、赤石鋼……六色鉱石鋼は全部……ミスリル、ダイヤ原石、少量だけど神鉄まであるのか……」

確認を終え、必要な分だけ鉄を持って、炉の前に行く。

すでに炉の温度は良いくらいであった。道具を用意して、まず、手順を確認する。

「铸造より、鍛鉄にするか」

手順は頭に浮かんでいる。問題は、体が動くかだ。

「やるとするか」

結論から言おう。作ることは成功した。

「……ちよつと作りすぎたかな？」

作る前に感じた不安は、杞憂だったらしく、すいすいと体が動き、すぐに剣が出来た。それなりの手順は踏んだものの、簡単に出来たため、調子に乗った僕は、次々と武器を思いつくままに作っていた。

その数、剣・6本、槍・2本、弓・2本（矢・100本）、ナイフ・12本、戦斧・1本、大鎌・1本の計24個。

「どれもいい出来だと思っけど……」

スキル『鑑定』の代わりなのか、意識してみると、剣のステータスが見える。が、比較対象の物がなかったため、よくわからない。

「まあ、いいや。寝よう」

武器をまとめて持ち上げ、倉庫に保管して、寝室へと向かった。この時、僕は自分の体の異常に気付くべきだったのかもしれない。鉄製の武器を、まとめて持ち上げられたと言う異常に……

明けて、二日目。

僕は、居間で剣を振るっている。レムリアさんから聞いた話によると、ゲームと同じようにこの世界にも魔物が存在しており、人を襲ったりしているというのだ。

治安もそうよくはないため、積極的に使おうとは思わないが、最低限火の粉が払えるぐらいの力は持つておきたい。

そう思い、武器と魔法がどれだけ使えるかを確かめることにした。まず武器をと思い、剣を取り出してきて、素振りを始めた。

振り始めた時は、どこか違和感があったが、2本、3本と振って行くうちに、その違和感がどんどん消えていった。そして、100振らないうちに、自由自在に剣が振れるようになった。他の武器も試してみたところ、同じように簡単に振れた。

「おかしい。武器ってこんなに簡単に使うことが出来るのか？」

使ったこともないような物を、自在に操るなんて出来るものなのだろうか？

「……考えても分からないな。使えるならよしとするか」

楽観的思考でそう考え、武器を倉庫にしまう。

次は魔法だ。

「おかしい、明らかにおかしい」

そうつぶやく僕の周りには、八つの球体が飛んでいる。火、水、風、土、雷、氷、光、闇の8種だ。この球は属性球と言って、魔法の初歩で、出すことの出来た属性が使えるというものである。

確かにレムリア・オンラインで僕は、全ての魔法をマスターした。『魔法知識』によれば、この世界でも複数の魔法が使える人は、かなりいるらしい。しかし、ゲームの方でもそうだったが、同時に2種の魔法は使えないということになっているはずだ。

「なのになんで？」

初めは、順番に一つ出しては消し、一つ出しては消しを続けていたが、ふと、いっぺんに出せないかと思ったのだ。無理だと思って

やってみたところ、あっさりと8個の属性球が出たというわけだ。

「もしかして、これはチートと言うやつか？」

ネット小説などでよく見かける、転生チート。それが僕にもおきているとしたら……

「そういえば、武器の重さをあんまり感じなかった」

ひきこもり気味であつたとはいえ、体は鍛えてあつた方なので軽く感じるのかなと思っていた。

しかし、今僕の体は女の子の体。昨日、風呂に入る際きっちり確かめたから、間違いはない。多少なりとも鍛えてあつた体ではなく、どこもかしこも柔らかかった体で、鉄製の武器を軽々と振りまわしていたのだ。異常としか言いようがない。

ふと、レムリアさんが言っていた言葉を思い出す。

『体の方は、私が作りました。久々の会心の出来です』

『私の持つすべてを詰め込んだ最高傑作』

文字通り、詰め込みすぎです。レムリアさん……

さて、出来ることと、出来ないことを確認しようと思っていたんだが、現状個人的な所に関しては何でも出来るような気がする。

神官の回復魔法は、魔術師の魔法とほぼ同じため、出来るであろう。確かめるために怪我をするのはバカらしい。

錬金術 - 金を作り出すのではなく、金属を練り合わせるといふ物 - は、レシピ自体は頭の中にあり、それに沿ってやるだけだ。鍛冶と同じようなもので、出来ると判断してもいいだろう。

詩人は、試してみたが、ほぼすべての楽器が弾けるようになっており、それに合わせて、歌の方も上手く歌えるようになっていた。呪歌の方も、効果が発揮したことも確認している。

弓使いは、さっきの武器練習の時に確認済みだ。

では、出来ないこととは何か。

まず、戦士の技スキル。当たり前と言ったら当たり前である。戦闘を有利に運ぶために重宝したスキルなのだが、現実に置いて、2

段突きで一撃一撃の攻撃力が上がるはずがない。自由自在に振れるのなら、自由に技を作ってしまう方がいいことだ。同じことは、弓使いにも言える。

次に、魔法の技スキルだ。魔法と言う物は、想像力が物を言う物であって、イメージすることが出来るなら、どんなことでも出来るのだ。故に、こまごまとした技など必要なく、イメージして、発動キーを口に出せばいいのだ。神官の方も同じだ。

メニューもほとんど使えなくなっている。システム、チャット、メールは完全に消えており、ワールドマップは、白地図と化しており、役に立たない。ステータスからは、HP及びTP、経験値が消えている。アイテム欄は問題なく使えた。

他にも細かく使えなくなった物はあるが、特に困るような物が使えなくなったということはない。

スキルなんか使わなくても出来るようなやつが消えたただけだ。特に問題ないだろう。

そう結論付けた僕は、もう良い時間だったので、寝室に引き上げることにした。

第4話 現状確認(3) (後書き)

いきなりアクセス数が伸びてびっくりしました。
こんなつたない文章でも読んでいただけると嬉しく思います。
誤字、脱字、指摘、感想も随時募集中です。

第5話 初戦闘と決めたこと（前書き）

アクセス数がとんでもないことになってる……
日間八位って……何これ、こわい。

第5話 初戦闘と決めたこと

二日ぶりに出た外は、どこまでも抜けるような青い空と、鮮やかな緑の大地が広がっていた。そして、周りに立ち込める殺気と獣臭。僕は今、灰色狼の群れに取り囲まれています。

「はあ……」

魔物知識の中から引っぱり出してきた基本情報によると、灰色狼は、比較的レベルの低い魔物だが、群れで襲ってくるので、危険なものである。

「出るんじゃないかったかな」

低く唸る灰色狼に向かって、剣で威嚇しながらそうつぶやく。

「食べ物、もう少ない」

ゲームのアイテムをそのまま引き継いだのだが、生きてく上で必要な食糧が、ほとんど無かった。ゲーム内では、HPを回復するアイテムとして、料理と言う物はあったが、回復量が微々たるものだったため、ほとんど持っていなかった。その為、早々に食糧が切れかけたと言っわけだ。

早急に人のいる村などに行かなくてはなくなり、大慌てで装備を整えたのだが、ここでまた問題が発生した。

「防具がない」

ゲームでは、男性キャラを使っていたのだ。当然、防具も男性のものしかないということになる。だが、今僕は女の子である。体格的に男性用防具を着けられない。無理矢理着ては見たものの、動きにくくて仕方がないと分かったので、止めることとした。

結局、鍛冶師の初期装備である作業着を着て、ホームの倉庫とつながっているマジックポーチを腰につけ、昨日作った剣を護身用を持ちホームを出たのである。

「どうしたもんかな……」

灰色狼の波状攻撃を軽々とかわしながら、考える。

相手の攻撃がゆっくり見え、自分の方はかなり速く動ける。余裕があるため、考えてしまう。『殺してもいいのか?』と。

魔物と言うのは、魔人や魔獣とは違い、邪神の邪気が物や動物の死体などに憑いて発生したものであり、無差別に人などを襲うため、排除しなければならない物と言うのが、この世界の常識である。

しかし、僕は平和な国日本の一般人だ。いくら危険なものだとはいえ、生きている（正確には違うが）ものを殺すのは抵抗がある。

「……ぐるああ……」

考えている間でも、灰色狼の攻撃はどんどん激しくなってくる。

逃げるのは不可能であるため、倒すしかない、倒すしかないのだが

……

「くそ！ なるようになれ」

跳びかかってきた一匹の攻撃を、横に半歩動きかわす。と同時に剣を振るい、灰色狼を切り裂く。

「え？」

予想していた肉を割く感触はなく、実にあっさりとした感触だった。さらに、真つ二つになった狼の体からは血の一滴も出ず、地面に落ちると同時に消えてしまった。

「な……」

「ぐるあ……」

一匹倒されたせいか、前にもまして攻撃が激しくなる。

びっくりしたり、考えたりしている暇はない。今はこの場を切り抜けるのが先だ。

「ラスト」

最後の一匹を切り裂いて、落ちたその体が消えたのを確認し、僕は、その場に座り込んだ。

「はあ、はあ、疲れた……」

体力的には全く問題ないはずなのだが、ここまで疲労を感じるのは、精神的というやつだろう。いくらチート能力を持っているとはいえ、命のやり取りをしていたのだ。その上に、生き物を殺すという行為をしたのだ。精神的にかなりの負担だろう。

「割り切らないといけないか……」

頭では解っているのだが、心が追い付かない。

「……よし」

葛藤はあったが、割り切る。割り切ることにした。死体が消えたことを浄化したと考えるようにする。一種の逃げだが、こうしないと先に進めそうにない。

軽く手を合わせて、立ち上がる。ふと、足元を見ると、そこに灰色の何かが落ちていた。

「なんだ？」

拾い上げてみると、1メートル四方ほどの毛皮だった。さっきまでこんなものなかったはず。疑問に思ったため、意識を切り替え、鑑定モードに入る。

『名前：灰色狼の毛皮 レア度：1 備考：灰色狼を倒した時に手に入る毛皮。衣類おもに防寒着に使われることが多い』

ドロップアイテムデスカ。こんなところがゲームと同じとは思いませんでしたよ。

鑑定モードのまま、周りを見回すと、いくつかのドロップ品があることが確認できた。その内訳は

『灰色狼の毛皮：5枚（レア度1） 灰色狼の牙：2本（レア度1）
灰色狼の尻尾：1本（レア度3）』

であった。

「尻尾？ しかもレア度3」

どうやら、アクセサリーにするらしく、魔よけの効果があるとのことだ。

「うーむ、よくわからんな」

そう言いながら、ドロップ品を拾い集め、ポーチに入れる。

倉庫につながっているため、いくらでも入る上に、重さが全然変わらな

「……」

突然ながら決めたことがある。

ホームの使用をなるべく制限しようと思うのだ。

理由は一つ、便利すぎるのだ、あれは。

別空間にあるため、魔物は襲ってこない。食べ物は手に入らないが、水やお湯は使いたい放題。原料さえあれば、鍛冶や錬金はいつでも好きなように出来る。

僕は、この世界で暮らしていくことになった。それならば、この世界の人と同じように暮らしていくべきではないかと考えたのだ。便利なアイテムを使い、強い武器防具を持ち、最強チートな力を使って、俺無双と言うのも魅力を感じないでもないが、なんとなく面白みを感じない。出来て当たり前のことをやっているだけという風になりかねないからだ。

チート能力はどうしようもない。使わないという選択肢はない。それを使っても難しいと思えるようなことに挑戦しようと思う。

「そのためにも、早く人里に行かないとな」

さつきから歩き続けているのだが、人影は見つからない。道みたいなものはないかと見ているのだが、視界には入ってこない。

そのかわり、角兎、大鼠、灰色狼など、何匹もの魔物に襲われた。間違った方向に進んでいるのか？」

ドロップ品を拾いながら、そう思う。

高いところから確かめようにも、起伏のない平原ではそう高いところはない。

せめて木なり何なりあれば……

「……僕って、飛べるんじゃないかってっけ」

神人の特殊スキルに、飛行という物があつた事を思い出す。

「物は試した、やってみよ」

翼を動かしてみたものの、風が起こるだけで、体が浮かぶ気配はない。

やり方がまずいんだろうか？ 翼を動かすだけではダメってことなんだろうが、どうすればいいのか？

「ジャンプ」

そういえば、何かの本で読んだ覚えがある。鳥は飛び立つ瞬間に、ジャンプしていると。その為、腕にとめた鳥が、ジャンプしようとした瞬間に腕をちよつと下げると鳥は飛び立てなくなる。それと同じことが言えるのでは？

「仮定の話だが、やってみる価値ありだな」

軽くジャンプすると同時に、翼を動かしてみる。

「おお」

軽く翼を動かしたただけなのに、体が浮かび上がる。立ち姿勢のまま、翼を動かせば、どんどん高度が上がって行く。

「自分の力じゃないな」

感覚で分かった。翼を利用して、風の力を借りて飛んでいるのだと。

「おっと、まずは人里を見つければ」

当初の目的を思い出しぐりと辺りを見回すと、自分が歩いてきた方向に、道を発見。その向こうには、いくつか細い煙が立っているのが目に付いた。

「本当に逆方向だったとは……」

あの襲われたりしながら、進んだ距離は無駄だったのかと思うと、少しがっかりする。

「練習の意味も込めて、このまま飛んで行こうかな」

翼で感じている、風の動きを操作して、体を地面と平行にする。

そのまま、体を前に押し出すように翼を動かすと、スーと前に進

む。

「村か、町か知らないけれど、その手前まで飛んでいくか」

手前で降りて、後は歩いてゆけばそんなに騒ぎにはならないだろう。

第5話 初戦闘と決めたこと（後書き）

戦闘シーンがうまく書けない。だれかうまく書く方法を教えてくれないでしょうか？

お知らせ・しばらく忙しくなるので、更新が滞る可能性があります。楽しみにしてる方（いるのか？）気長にお待ちください。

誤字、脱字、指摘点、感想をお待ちしています。

第6話 村にて(1)(前書き)

久しぶりの投稿

第6話 村にて（1）

村の手前、100メートル程離れたところで降りる。そのまま飛んでいてもよかったのだが、旅をしているということを装わなければならぬからだ。

マジックポーチは便利だが、こちらの世界の人が持っているとは限らない。軽装で行って怪しまれるより、それなりに荷物を用意するべきだろう。

そう判断し、倉庫からリュックを取り出す。その中に戦利品であるドロップアイテムを入れた袋を詰め込む。ついでに着替えとして最初に来ていたシャツとスカート（なぜか下着を含め何枚もあった）を入れる。剣をしっかりと左腰に固定し、体の前にナイフを装備する。右腰にポーチを着け、リュックを背負う段になって、ふと気付く。

「羽があつたか……」

どういう原理か知らないけれど、服を透過して羽が出ているのだ。リュックまで出来るかどうかは、分からない。下手して羽を痛めたら、飛ぶことが出来なくなるかもしれない。

「あの感覚は、癖になるからな」

いろいろ試したのだが、ほぼ思い通りに飛べるのだ。急上昇、急下降、宙返りに、誰もみ飛行なんでも出来た。風を使って飛ぶせいか、風の幕みたいなのが体の周りに出来、風を切るという感覚はないものの、雨に濡れたり、虫などが体にぶつかったり、ということがないのである。

「……試してみるか」

リュックの代わりになりそうなものはない、あつたとしても、詰め替えるのは少し面倒だ。

透過しろと思いがからリュックを羽に近づける。すると、思いが通じたのか、羽がリュックを透過して出てきた。

「むう？ 不思議だ。普通に触れるのに……」

後になって出来た神人の知り合いによると、この現象は透過の術
といい、神人や獣人が本能的に使える術だということだ。逆に知ら
ないことに驚かれた。

問題が解決したため、リュックを背負い改めて村の方に歩いてゆ
く。

村に近づくにつれて、日本の村とまるで違うことが分かる。

まず簡単な木の柵に、村と畑などが囲まれている。その柵の周り
に、簡単な堀が掘ってあった。鑑定モードで見れば、柵には魔物除
けの結界が張られているのが分かる。外観の見た目的には、戦国時
代の堺の町に似ているだろう。ただし、門のところに見張り台など
はなく、門は開け放たれているが。

急ぐ理由もなかったため、ゆつくりと村の入り口まで歩く。

堀にかかった簡単な橋を渡り、長めの棒を立てただけの簡単な門
をくぐり村の中に入り、辺りを見回して村の全容を確認する。

街道をそのままメインストリートとして利用しており、いくつか
の家が道沿いに建っている。いくつかの横道があるが、そのほとん
どが、農地につながっており、パラパラと家が建っている。なんと
いうか、町と村がごっちゃになったような感じだ。

まだ日が高いせいか、道を歩いている人はまばらで、奥にある農
地の方から人の声が聞こえる。

「とりあえず宿屋か？ いや、その前にお金をどうするか……」
切実な問題の一つだ。

ゲームで使っていたお金は、金貨、銀貨、銅貨の三種類だった。
試しに金貨を出したが、ここで使えるのかどうかも分からない。道
具屋にドロップアイテムを売るという手もあるが、買い取りをやっ
ているか定かではない。

「まずは、場所を聞か」

ちょうど、こちらに歩いて来る老人の姿が目にとまったので、そ
の人に聞こうとこちらから歩み寄る。

「あの……」

「ここは、ワルタの村です」

「そうですか。それで……」

「ここは、ワルタの村です」

「いえ、あの……」

「ここは、ワルタの村です」

「……」

壊れた機械のように、同じことを繰り返す第一村人。つかRPGか？　こんなむだなところでRPGなのか？

「ボケてんのか？　糞爺」

「なんじゃと、このアマ」

どうやらボケてはいないようだ。

「チッ。ばれてしまつてはしょうがないのう。なにが訊きたいんじや、嬢ちゃん」

どうやら遊ばれていたらしい。舌打ちまでしなくてもいいと思うが。

「えーと、この村に、宿屋はありますか？」

「宿屋か？　あるぞい。この道沿いに少し行つたところにある。青い屋根じゃし、ギルドの隣じゃからわかるじゃろ」

あるのか、よかった。

「……ギルド？」

「なんじゃ。珍しい物でもなかるう」

「冒険者ギルドのことですよね？」

「そうじゃが」

なにを言っているんだという目で見る老人を無視して、考える。

冒険者ギルドがゲームや漫画、小説と同じような組織なら、ドロップアイテムの買い取りをやってくれるはず、さらに登録することが出来れば、これからの旅が有利になるかもしれない。

「おい、どうした？　嬢ちゃん」

「いえ、ありがとございました」

老人に礼を言って、その場を後にする。

当面の目標は、青い屋根の宿屋の隣にあるギルドだ。

場所はすぐに見つかった。青い屋根の建物は、それしかなかったからあっさりと見つかり、隣にあるギルドも分かった。

「まずは、ギルド」

看板に、『冒険者ギルド・ワルタ支部』の文字と、シンボルマークなのか、盾のなかに獅子の横顔が書かれてあるマークが書かれていた。

扉を開けて入ってみると、中はそう広くなく、奥にカウンターがあった。

「ん？ 新顔だな。何か用か？」

カウンターに座って、煙草をふかしている大柄な男が訪ねて来る。カウンターに置かれたジョッキの中身は酒だろう。

「ほう、神人か。珍しいな」

なんとなく横柄な態度に、ちょっとムツとしたが、当初の予定通りにすることにした。

「ドロップアイテムの買い取りってやっています？」

「ん？ ああ、やっているが、何かあるのか？」

尋ねる男の前に、ドロップ品の入った袋を置く。

「確認するから、座ってる」

そう言い、男が袋の中を確認し始める。

その間やることがないので、大人しく椅子にすわり、周りを見渡す。

広くない空間に、テーブルとイスがセットで何脚かあるだけ、掃除は行き届いているのか、ほこり一つ落ちていない。目の前で、何かつばやきながら頭をかき、鑑定している男がやっているのだろうか？ だとしたらものすごくシニールな光景になるな……

「ふあゝあ」

今日もギルドは開店休業。客の一人も来やしねえ。

まじめな女性従業員は、『お客様に気持ち良くしてもらおう』と言って、毎日のように掃除をしているが、おそらく無駄だろう。

客が来ないことは、平和であるんだからいいことなんだが、暇なのはいただけない。王都勤務の奴らは、楽な仕事だと言いが、なにもしないっていうのは結構苦痛だ。

「ふあゝあ」

もう一つあくびをして、エールが入ったジョッキに手を伸ばしかけたところで、カランと言う音とともに、一人の子どもが入ってきた。

「ん？ 新顔だな。何か用か？」

入ってきた子どもの背中には、大きな羽が付いていた。

「ほう、神人か。珍しいな」

本当に珍しい。神人は、あまり外界のことに興味がない奴が多く、ほとんど里から出てこないのだ。ましてや子どもなんて、珍しすぎる。

近づいてくるにつれて、その容姿が明らかになる。

一言でいえば、可愛いだろう。ストレートの銀色の髪、大きめのスマイレ色の瞳を含む顔のパーツが、バランス良く収まっている。低身長がさらにそれを強めている。うちの可愛いもの好きの女性従業員が好きそうな容姿だ。

「ドロップアイテムの買い取りってやっています」

鈴を鳴らしたような声でそう訊いてくる。

ん？ 冒険者カードの提示がないってことは、こいつ冒険者じゃないのか？

「ん？ ああ、やっているが、何かあるのか？」

そう訊くと、カウンターの上に袋をのせる。

「確認するから、座ってろ」

袋の中身を見て、さらに驚く。

「灰色狼の毛皮だと、尻尾もありやがる。角兎の角に、大鼠の毛皮

……」

角兎や大鼠ならともかく、灰色狼だと。この量からみて、群れを倒したということになるが、パーティーで挑むのが普通の灰色狼の群れに、一人で対峙して、一人で倒したと言うのか？ 信じられん。しかし、証拠の品がある以上認めざるを得んのだが……

「……？」

不思議そうにこっちを見る少女の顔を見ると、自信をなくす。

第6話 村にて(1) (後書き)

ようやく、ビリノアさんの容姿がちらりと出ました。
誤字、脱字、指摘点、感想、お待ちしています。

第7話 村にて(2) (前書き)

今後、週一更新になります。

第7話 村にて(2)

袋の中身を確かめていた男が、こちらをじっと見て来る。何か問題でもあったのか？

「嬢ちゃん、これ、本当に前が仕留めたのか？」

灰色狼の尻尾を持って、そうたずねてくる男。

「……どういう意味ですか？」

少しいらついたので、声がとげとげしいものになる。確かに、魔物を倒すのに一太刀で済んだとはいえ、楽だったわけではない。下手すれば、こちらが死ぬかもしれないのだ。

「すまん」

僕の発する怒気に気付いたのか、男はあっさりと謝る。

「証拠品がある以上、お前が仕留めたということは、理解できる。理解できるが、信じがたいというか……」

まじまじとこちらを見ながら、男はそう言う。

なんとなくわかる気がする。140センチない身長と童顔から、僕は子どもにしか見えていないのだろう。道を尋ねた老人と目の前の男が『嬢ちゃん』と僕のことを呼んできたことから分かる。この体は、14歳の女の子なのだから、間違っではないのだけれど

……

「……鑑定は、終わりましたか？」

「？ 終わったぞ」

微妙に落ち込んだ僕の問いに、首をかしげながら男は答える。

「内訳は、大鼠の毛皮3枚、角兎の角2本、灰色狼の毛皮11枚、牙7本、尻尾2本だ。しめて、銀貨45枚だ」

高いのか、安いのかよくわからない。まあ、冒険者ギルドという、いわゆる全国チェーン店ならば、きつちりと相場は決まっているはずだから、適正価格ということなのだろう。

小袋に入った銀貨を受け取り、その中から一枚取り出す。そして、

自分が持っている、ゲームで使われていた銀貨を取り出し比べてみる。

「……同じだ」

どうやらゲームのお金は使えるみたいだ。

「おいおい、嬢ちゃん。そんなことしなくても、ちゃんとした金だぜ」

男が、苦笑しながら言ってくる。

「僕の持っているお金が使えるか、確かめただけですよ」

「あん？　どういうことだ？」

ちようどいいや、この男から、いろいろ聞きだそう。

とりあえず、経歴をでっち上げていろいろ聞きだした。

まず、ここがシルヴィア王国のブリジット辺境県であること。

そして、この辺を治めているのが、ガドガー・セリン・ブリジット辺境伯とのことだ。

「変わりもんでな、中央に行かず、領地に引っ込んでいるんだ」

貴族ならば、王都シルヴィアで政治に参加して、領地は代官にまかせつきりという人が多い中、辺境伯は県都ブリジットで領地経営に精を出しているということだ。

「ふーん」

「興味なさげだな」

実際あまり興味はないが、情報としては取っておこう。

ワルタの村から県都ブリジットまでは、街道を使い、馬車を使って約一週間かかるという。途中『馬車溜り』という施設があるが、徒歩での移動はあまりお勧めできない。

「パーティーを組んでいるやつらならともかく、一人の場合魔物の襲撃に警戒出来ない。死に行くようなもんだ」

結果張ればなんとか行けるような気もするけど、それは僕がチー卜だからだろう。普通の人には無理だろうな。

王都まではもっとかかるのだが、県都と王都を繋ぐ移動魔法陣の

おかげで、ほんの一瞬だそうさ。

続いて、お金について。

この世界で普通に使われているお金は、金貨、半金貨、銀貨、半銀貨、銅貨の5種類だそうさ。他に、水晶貨というのものもあるそうだが、一般の人には縁のない貨幣で、主に国際間での取引に使われているものだ。また、お金は世界共通で、どこに行っても使えるとのことだ。

「だいたい、銅貨10枚あれば一日生活できる。銀貨2枚あれば、一家四人が一ヶ月は暮らせるだろう」

ちなみに、銅貨50枚で半銀貨1枚、半銀貨2枚で銀貨1枚、銀貨50枚で半金貨1枚、半金貨2枚で金貨1枚だそうさ。

それで行くと、ドロップアイテムの銀貨45枚って、高くな。

「ドロップアイテムは、高級衣服や防具に使う。一般ではもっと安い素材を使っている。大体、手に入れるのが命がけなんだから、高くなるのは当たり前だろう」

「……納得しました」

ワルタの村について。

元々は、ただの農村だったのだが、10年ほど前、爵位を継いだガドガー氏が街道の整備事業を始め、隣国、アンシアン帝国まで続く立派な街道を作ったのだ。

流通を活発にするという目的を掲げていたが、帝国との交易は海路中心で、陸路はあまり重視されていない。真の目的は、ガドガー氏が、帝国で行われる有名な祭りを見物に行くためだそうさ。

その時期になると、街道を行き来する人数が増える。必然的にこの村に訪れる人も増え、その時期だけ開かれる宿や、商店が街道沿いに発展する。しかし、祭りの時期限定で平素は農作業中心となる。その為、こんな中途半端な村になったそうさ。

「……ガドガー氏は……」

「言わない方がよいぜ」

一応曲がりなりにも領主さまの悪口はよしておこう。

冒険者ギルドについて。

曲がりなりにも所属しようとしている組織なので、まじめに聞く。「冒険者ギルドとは、冒険者の冒険者による冒険者のための組織だ」なんか、某国の政治家の発言に似ている。

要するに、冒険者の地位向上のため、組織されたものだ。

ギルドが出来る前は、冒険者というと、依頼の取り合いで殺し合いをしたり、ドロップアイテムを安く買いたたかれたり、それに切れて商店を襲ったりと、ならず者と同意義だった。

これではいけないと思った、一部の良心的な冒険者たちが立ち上げたのが、現在のギルドの原型となったものだ。初めは苦労したそうだが、確実に実績を積み、信頼を得て、今の規模になったということだ。

「だから、現在でもギルドの規則を破るやつには厳しい罰則がある。規則自体は、ごく普通のものだな」

そう言って、男―どうやらギルドマスターらしい―は、いくつか例を挙げたのだが、ごく当たり前のことがほとんどだった。

「ギルドに入るにはどうしたら？」

「簡単な審査を受ければ、誰でも入れる」

入りたいと伝えたと、マスターは黒水晶の玉を取り出した。

「なんですか？ これ」

「登録球だ。これに基本情報を読み込ませた後、登録カードに転写して登録完了だ」

基本情報？ どこまでかは分からないけど、ちょっとまずいような気が……

「その情報は……」

「ん？ ああ、俺を含めてギルド職員であろうと見ることは出来ないよ」

ちよつと安心した。

「犯罪とか起こされたら、すべて公表するけどな」

それはまあ、良いだろう。起こさなきゃいいだけの話だ。

言われた通り水晶に手を置くと、一瞬何かが体の中を駆け抜けたような感じがした。

「終わりだ。もう良いぞ」

「随分とあっけないですね」

「まあな、昔はいちいち書いてもらっていたんだが、これが出来てだいぶ楽になったな」

水晶を叩きながら、マスターが答える。

「カードが出来るまで少しかかる。その間にカードの説明をしてやるう」

冒険者カードは、単に冒険者の身分を保障するものだけではないのだそうだ。

「ギルドに金を預けていれば、提携店で財布としても使える。また、登録すれば、相手と連絡することも可能だ」

また、魔物を倒した記録が残る機能や、魔物の種類や薬草の種類を調べる図鑑機能も付いているというのだ。なんとというか携帯みたいだな。

「便利なものだが、かなり高いぞ。初めての時はタダだが、再発行の時は、半金貨1枚払ってもらう」

一般家庭が2年は暮らせる値段ですか。かなり高額ですね。

「ほれ、お前さんのカードだ」

マスターはそう言って、金属の板を渡してきた。

『ビリノア・バクスター 女 神人 14歳 冒険者ランクF』

書かれていたのは、これだけだった。

「職業とかは、ないんですね」

「まあな。どんな職業であろうと、冒険者は冒険者として扱われる。同じように、種族、性別、年齢、身分なんか全く関係がない。あるのは、実力だけだ」

シンプルで分かりやすいです。

第7話 村にて(2) (後書き)

誤字、脱字、感想お待ちしています。

5月28日 修正しました

第8話 村にて(3) (前書き)

村というより、ギルドにてのほうがよかったかも……

第8話 村にて(3)

「食事の改善を要求します」

「藪から棒に、なんだ？」

説明を聞くために来た冒険者ギルドで、マスター相手にそんなことを言ってもしょうがないが、どうしても言いたかったのだ。

なぜ、そんなことを言いたくなったのか？ それは昨日までさかのぼる。

ギルドでカードを受け取った後、もう遅いからという理由で詳しい説明を明日にしてみらうことにした僕は、その足で宿屋に向かった。

「いらつしやい」

『南の夕日亭』という名前を持つ宿屋は、酒場も兼ねており、仕事帰りに飲みに来た客でいっぱいだった。

「お泊りですか？」

入ってすぐのところにあるカウンターの中から、にこやかな笑顔で女性が訪ねる。

「えーっと、神人用の部屋ってありますか？」

神人用の部屋というのは、神人用のベッドが置いてある部屋のことである。神人は、羽があるという関係上、他の種族のように横になつて眠るということが出来ない。その為、専用寝台でシートを肩から掛けて座って寝るというスタイルを取る。通称、鳥の巣というものだ。

「申し訳ありません」

謝るってことは、ないってことだろう。大量のクッションとシートで代用できるので、頼んでおく。

「一泊、銅貨20ですが、何泊しますか」

「とりあえず10泊で」

十日後に、商会の商人たちがくるそうなので、それに便乗して京都まで行くつもりなのだ。

さっそくカードを使って支払いを終え、二階にある部屋に向かう。部屋自体は、ホテルのシングルルームといった感じの部屋だ。寝起きするだけならこれくらいで構わないだろう。お風呂はないが、村の中に共同浴場はあるとのことだ。

「お待たせしました」

部屋のチェックをしていると、ここの娘だろうか、12、3歳くらいの女の子が、シーツに包まれた大量のクッションを運んできた。「これだけあれば、足りませんか？」

「うん、大丈夫。ありがとう」

「どういたしまして、食事の準備が出来ているので、下まで来てください」

笑顔でお礼を言うと、女の子も笑顔で答えてくれた。

うん。感謝の言葉と笑顔は、コミュニケーションを円滑にしてくれるな。

「そのまま荷物を置いて、食事に行つたんですよ」

「口に合わなかったのか？ メア리さんの料理は絶品だと思うが……」

メア리さんというのは、『南の夕日亭』のおかみさんで、宿を切り盛りしている豪快なお母さんだ。ちなみに、入口のカウンターにいた女の人は、メア리さんの長女シリルさん（19）、クッションを運んでくれたのは次女のリリアちゃん（11）だ。後旦那さんと息子さんがいるらしい。

「美味しかったよ。今まで食べた料理でも五指に入るね」

料理は実にすばらしかった。グルメではないものの、食事にこだわりがある僕としては満足いくものだった。ただ塩で焼いただけの肉がなんであんなにうまいのか？ 時間をかけて、丁寧に煮込まれたスープだとか、とても普通の宿屋の食事とは思えない。

だが、問題はそこではない。

「問題は、パンです」

「パン？　メアリさんのパンは、村随一のうまさだぞ」

こちらのパンは、イースト菌なんかで発酵させたものでなく、硬くて水気がなくぼそぼそしている。スープにつけて食べるのが基本だそうだ。発酵させたパンとは大違いだ。

「あのパンか、普通なんですか？」

「？　他にどんなパンがある？　貴族たちのは知らんが、普通だと思っぞ」

あのパンが普通だとすると、今後どこへ行っても同じ物しか出てこない可能性が高い。慣れればいいかもしれないが、食に対してこだわりがある僕としては、元の世界のパンが食べたい。この体は食が細いので、なるべく美味しい物を食べたいのだ。

「うゝん、自分で……しかし、……菌って、うゝん」

「おい、ギルドの説明は良いのか？」

マスターの声で、本来の目的を思い出す。

「すいません。お願いします」

「あーっと、昨日はどこまで話たか？」

「えーっと、聞いたのはギルドの成り立ちと、カードについてですね」

「そうか。後は、依頼の受け方とランクのみだな」

おおよそ予想はついていたが、ほぼその通りだった。

依頼は、討伐・採集・雑務の三種類に分かれている。

討伐は、その名のとおり、魔物を倒してくれという依頼である。

報酬と評価は高いが、危険性が最も高いものだ。国からの依頼も結構あり、もしかしたら出世できるチャンスになりうるため、冒険者の人気が高い。

採集は、森に生える薬草や、鉱山にある鉱石などを取ってくるというものだ。依頼によって、報酬や評価、危険度が変わってくるもので、少し慣れた冒険者がよく利用するらしい。

雑務は、その他諸々である。要するに街の中でやる雑用というもので、危険度はほとんどないが、報酬は低い。ただ、受けることによって、ギルドの好感度が上がるため、ギルド内評価は結構高い。しかし、冒険者からの評価は低い。

「護衛は、やっていないのですか」

今度来る商会の護衛として県都まで行こうと思っているのだが……

「雑務依頼の一つだ。雑務の中で最も人気のある依頼だな」

依頼の受け方は簡単で、ギルドにある掲示板に張り出されているのを、はがしてカウンターに持ってくるだけ。後は、カードと依頼書を渡し、カードに依頼を受けたことを読み込ませて完了。

「掲示板に？」

ギルドの隅に掲示板はあったが、そこには何も張られていない。

「ま、こんな田舎だとギルドに依頼を出さなくても、自分たちでなんでもやってしまうから……」

時折、討伐の依頼がくるそうだが、採集や雑務系の依頼はほぼ来ないそうだ。

続いて、ギルドランクについて。

ギルド員は、それぞれS～Fのランク付けがしており、依頼の達成状況や評価から、ランクの上下が下される。Fが最低で、Sが最高位だ。

「ま、Sランクなんて、数えるほどしかないがな」

実際、片手で数えられるくらいしかないとのこと。一番多いランクはDで、全体の6割を占めるそうだ。

ランクは、依頼を受けるときの目安として使われるのだが、依頼自体にランク制限はしていないらしい。

「してないんですか？　じゃあ、いきなりSランク依頼とかでも受けられるんですか？」

「ああ、依頼者が制限してなければな」

ほとんどの高ランク依頼は、制限がしてあるのから、安心するようには言われた。制限してないやつは、ギルドが出したフェイク依

頼だという。

なぜこんな風になっているかという、自分の実力も分からない人、お断りということらしい。

ギルドとしては、なるべく信頼の下がる依頼の失敗をなくしたいのだ。

だが、冒険者の中には、自信過剰な奴があり、自分の手に負えない依頼を受け失敗、最悪命を落とすといったことが起こるのだ。過去に、それによって引き起こされた最悪の事件があつてから、高ランク依頼のフェイクを用意し、自信過剰な冒険者の鼻をへし折るといったことをやっているのだ。

「そんなこと僕に話していいんですか」

ギルドの重要な機密というやつでは……

「良いだろ。嬢ちゃんは無茶するようなタイプに見えんよ」

まあ、のんびり楽しく過ごしたいと思つていますから。ぶっちゃけ、ギルド員になつたのも、旅するのに必要だと思つただけで、無理にランクを上げようだとかは思っていない。

「適度に依頼をこなさないと、ギルドカードは取り上げになるぞ」義務をこなさないやつに、権利を渡さないというものです。それじゃあ、さつそく依頼を……って、なにもないんですたっけ。

そのあとすぐ、ギルドを追い出された。なんでも、『嬢ちゃんみたいなのやつが捕まったら大変なことになる』人が出勤してくる前に出て行つてくれとのこと。

いい加減なように見えても、ギルドマスター。ちゃんといろんなことを考えているようだ。

さてと、今日は村を回ってみようかな。武器や防具の店はないと思うけど、道具屋はあるだろう。旅に必要な道具を見つくるって、ついでに服とかも見て回ろうかな。

第8話 村にて(3) (後書き)

誤字、脱字、指摘点、感想お待ちしております。

第9話 食料改善計画（前書き）

メロンパン食べたいな……

第9話 食料改善計画

「ふはははははー」

「び、ビリノアちゃん？」

僕は、部屋のテーブルの前で、こみあげてくる衝動のままに高笑いを挙げていた。

「ふはははははははー」

「ビリノアちゃん、帰ってきてー！」

掃除をするつもりだったのか、部屋に入ってきたリリアちゃんの声も聞かずに、ただ高笑いを続けていたのには、訳がある。

それは、テーブルの上にある瓶の中に入っているものである。これこそが、五日間かけて作られた、僕の努力の結晶である。

そう、話は五日前にさかのぼる。

ギルドマスターに『ヤバイ』奴が来る前にと、ギルド規則の本を渡され追い出された。

中世辺りでは、紙媒体って高級品のはずなのだが、この世界では違うのだろうか？

中身をちらつと見てみたが、手書きでなく、活版印刷で作られているようだった。

そういえば、宿の一階の食堂兼酒場の隅に、何冊かの本が無造作に置いてあったな。異世界ということ、現実とは違うのかな。

そんなことを、つらつらと考えているうちに、目的地である雑貨屋『猫の額』について。

……どうでもいいが、狭そうな名前だな……

「どんな保存食があるかを確認して、あればマントを買う予定だったんだ」

「う、うん」

リリアちゃんとベッドに腰掛けて、話をする。

リリアちゃんの引き気味の笑顔を、ガン無視して話し続ける。

「保存食の中で、これを見つけた時は――」

雑貨屋『猫の額』は、名前とは違い結構広い店内に、いろいろな商品だろつものが並んでいた。感じとしては、田舎や島にある唯一の商店――いわゆる何でも屋といったものであろう。

「ここは、『猫の額』です」

「なんでいるんだ？ クソジジイ」

なぜか、第一村人の老人が店の中で店の紹介をしてきた。

「ここは、わしの店じゃからのう」

不本意ながら納得した。

「で？ 何しに來たんじゃ」

「……店に來て買ひ物以外何をしろと？」

「近所のご隠居たちが集まって話し込んでいたり、奥さん連中が集まって雑談したりしておるが……」

「普通一人で入ってきたら、買ひ物だろつ……」

「ん？ 一人で來て、延々と商品に語りかけているやつもいるからの。ためしにきいてみたんじゃよ」

「……病院紹介してやれよ」

とりあえず、当初の予定通り携帯食とマントを見ることを伝える。

「携帯食？ パンと干物、瓶詰くらいかの。マントはこつちじゃ」

沢山の布が置いてある一角に案内される。

「衣類はオーダーメイドで、マント用の生地を選んでもらうてから、好きなデザインで作ってもらうことになっておる。完成まで、五日というところじゃよ」

布地はよくわからないので、店主お勧めの生地を使うことにする。

デザインは、シンプルなマントにフードを着けてもらうことにした。

「銀貨2枚じゃ」

「けっこうしますね」

「冒険者用のものじゃからな。これでも安い方なんじゃぞ」

値引き交渉はせずに、カードで払う。

「後は、携帯食じゃな」

こちらは、まだ買わないことにしている。出発は早くても九日後だ。今買っても荷物になるだけだ。

「これが携帯食用のパンじゃ」

渡されたのは、ものすごく硬いパン。パンで釘が打てそうですよ。「水やスープでふやかして食べるか、ナイフで薄く切って食べるものじゃ。そこそこの大きさで、腹持ちの方も良いから、たいていの冒険者が持つておるな。難点は水がないと食べにくいといったところかの」

次に取り出したのは、刻んだ野菜などが入った瓶。500mlのペットボトル位の大きさがある。

「瓶詰じゃ。調理した野菜を瓶の中に密封した物じゃ。そのまま食べてもいいし、スライスしたパンに載せて食べてもよい。適量のお湯で解かせば、そのままスープになる。難点はかさばること、瓶が割れやすいことじゃな」

確かに味はよさそうだが、なるべく荷物が少ない方がいい冒険者にとつては、少し邪魔だろう。荷馬車を持つ商人用といったところだろうな。

「これは干物、果物を干したものじゃ」

いくつかの袋を取り出す。

「手軽に、そのまま食べられるのが特徴じゃ。味の方も良いので人気はある。ただ、腹いっぱい食えるといった物ではないの」

おやつ程度じゃと言う店主の言葉も耳に入らない。

袋の中に入っていた物。それを見て、天啓のようにとある考えが浮かぶ。

「爺さん。空の瓶あるかい」

「む？ あるぞ」

無論袋と一緒に即金で買った。

これで、計画が実行できる。

「『美味しいパン生活』計画」

ビリノアちゃんの言葉を聞いて、私は初め呆れていた。
少なくともビリノアちゃんのネーミングセンスは、あまりよくない。

「これで、あのパンから解放される……」

ん？ 美味しいパン生活？ それって、お母さんのパンがまずいって事？

「ん？ 確かにパンはまずいよ」

「な！」

「ああ、勘違いしないで。おかみさんの料理の腕が悪いんじゃないで、パン自体がダメってことだから」

パン自体が？

「僕がいたところのパンは、もっとふつくらしていて、種類も多くおいしかったんだ」

確かにこの辺のパンは、固めだし種類もほとんどない。

「甘いパンもあってな、特にメロンパンが好きだったな」

甘いパン……

「……よだれ出てるよ……リリアちゃん」

おっと、いけないいけない。

さて、計画の第一段階——レーズン酵母液の製作は完了した。

レーズン酵母液——雑貨屋で買ってきた袋の中身のレーズンで作った、天然酵母だ。

イースト菌ほどではないが、パンの発酵に使う酵母を自作してみたのだ。

第二段階。パンを作るに入るのだが、まず、おかみさんから厨房を使う許可を得ないといけない。

まあ、これについては心配していない。あの人なら、某母親ごと

く一秒で了承してくれそうだな。

「良いよ」

本当に一秒で了承されてしまった。

「出来たら、あたしにも食べさせな」

そう言っ出ていくおかみさんは、無駄にカッコよかったです。さて、おかみさんに見とれてないで、作業を開始するかな。

まずは小麦粉。この世界の小麦粉は全粒粉なので、パンを作る上で問題はない。バター、牛乳は普通にあつた。塩は、岩塩だが何とかなつた。

問題は砂糖だつた。この辺りでは取れないらしく、かなり高級品だつた。

メロンパンが作りたかつたのだけど、諦めるしかないかと思つていた所、打開策があつた。村の畑の作物の中に、甜菜があつたのだ。無論即座に買い取り、砂糖の精製を始めた。結果、苦労したし、ちゃんとした製法でないものの、砂糖もどきは出来た。

もちろん、レーズン酵母液も準備完了している。

それじゃあ、レッツクッキングー！

結論から言うと、大成功でした。

朝から作り始め、生地をこね、一次発酵、成形、二次発酵、焼き上げに、半日かかったかいがありました。

ふわふわしながらも、もっちりとしたその触感懐かし、味の方も苦労した分いつもよりおいしく感じる。

おかみさんたちにも食べてもらったのだが、大好評だつた。作つてみたいとの事だつたので、酵母液の作り方と、パンの製法を教えてあげた。ついでに甜菜が砂糖の原料になるってことも教えておこつかな……

余談

ワルタ村——現在は辺境都市ワルタから伝えられた独自のパンの製法と、砂糖の精製は、またたく間にシルヴィア王国に広まり、各地で食糧革命がおこった。

作られたパンは、ワルタパンと称され、ブランド品として認識されるようになる。

その中心となったのは、ギルドの経営する宿屋のおかみだったが、彼女自身はそんなことに見向きもしなかった。

多くの人々が彼女のところに学びに来て、パン職人として巣立っていった。

弟子たちは、口々にパン革命を起こした彼女をほめるが、それに対して彼女の答えは、

「これは、あたしの考えた物じゃないよ。まあ、多少工夫はしているが、これを考えたのは、小さな可愛い女の子さ」
であった。

第9話 食料改善計画（後書き）

誤字、脱字、指摘、感想お待ちしております。

第10話 対人戦闘（前）

「どうしてこうなった……」

「俺にきくな……」

ここは、村の広場。目の前には剣を構える男。どことなく疲れているように見えるが、それは僕も同じだろう。

そして――

「なんなんですか？ このギャラリーの多さは……」

周りをぐるりと取り囲む大勢の人々。

「村人ほとんどが来ているような……」

この十日ほどで知り合った人の顔がちらほらと見受けられる。

「ま、娯楽の少ないところだからな」

僕と男の間に立っているギルドマスターの言葉に、僕は納得する。

「いい余興つてやつかい」

どうやら、目の前の男も理解したらしい。

「まあ、良いや。見極めてやるよ」

テンションを上げて構えなおす男に対し、僕はため息が出そうになるのを堪えて、武器を構えなおす。

ほんとどうしてこうなったんだろうな……

朝、ざわめきによって目が覚めた。

いつもは日の光で覚めるのだが、今日は、それよりもざわめきの方が大きかった。

朝も早い時間なのだが、村中が浮足立っているように感じられる。何かあるのだろうか？

「……ああ、今日あたりだったな……」

定期的に来る商隊が来るんだった。

周りに置いてあるクッションを、どけて立ち上がる。慣れたものだ。始めは、クッションにつまずいて転びそうになった事もあった

が、今はもうない。無意識のうちでやってしまえる。

寝巻代わりになっているシャツを脱ぎ、着替える。以前、そのまま下に降りて行って、メアリさんとシリルさん二人がかりで、交互に半日説教された。以来、着替えてから下に降りている。

「あ、ビリノアちゃん。おはよ」

「おはよ、リリアちゃん」

宿屋の娘であるこの子とも仲が良くなった。

リリアちゃんは、掃除やベッドメイキングを仕事としているのでよく会うのだ。あいさつを交わし、一言二言言葉を交わして行くうちに、お客様から友達にランクアップしたらしい。

「商隊が来るのって、今日？」

「うん、さっき先触れの人が来てたみたいだから」

「そっか、だから村中が浮足立ってるんだ」

「そうだよ。家も忙しくなるよ」

村唯一の宿屋じゃ仕方ないだろう。おしゃべりする時間も取れなくなるだろうことは、容易に察しが付く。

「じゃ、お仕事がんばってね」

「うん、ビリノアちゃんも」

掃除道具片手に、隣の部屋に入っていくリリアちゃんと別れ、裏庭の井戸に向かう。冷たい井戸水で顔を洗い、手ぬぐいでさっと水気を取る。

手ぬぐいを首にかけ、そのまま食堂に向かう。

「メアリさん、いつもの」

「はいよ！」

パンの焼ける良いにおいの中、メアリさんが朝食を運んできてくれる。

「あ、ずるい」

「なんでその子だけ」

ほぼ満席の食堂内から、文句の聲が上がる。朝は従業員が少ないため、普段はセルフサービスだ。

「うるさいよ！ 食べに来ているあんたには悪いけど、この子はVIPさんなんだよ」

うん、まあ、二日前にそうだった。

理由はパン。酵母とパンの作り方を教えたらこうなった。

自分の為だったので、お金などを取る気はなかったが、どうしてもお礼がしたいとのことで、宿代の割引をしてもらおうと思ったのだ。そしたら……

『宿代？ よし、タダだ。いつ来ても良いように部屋も明けといてやる』

と言われまして、食堂にも僕の席が作られて、いつ来ても食事が出してもらえるようになったんですよ。

食事を終えて、部屋に戻り出かける用意をする。用意と言ってもカードを首から下げ、必要ないけれど護身用の短剣を腰に差すくらいだ。

カウンターに座っているシリルさんに声をかけ、一路ギルドを指す。商隊が来るのなら、護衛に混ぜてもらおうと思っているので紹介をお願いしに行こうと思ったのだ。ダメなら、お金を払って客分として乗せていってもらおうと考えている。

「マスター、紹介してー」

ギルドに着くなり、なぜか、いつ来てもカウンターに座っているマスターに声をかける。

「……なにをだ？」

「今日、商隊が来ることになってますよね」

「ああ」

「その護衛として、県都までくつついていきたいので、紹介してほしい」

「そういうことか。紹介はしてやるが、雇うかどうかはあちらさんが決めることだぞ」

まあ、そんなことは百も承知だ。だが、個人的に売り込みに行くよりも、ギルドを通しての方がずっと雇われる可能性が高い。だから

ら紹介を頼んだのだ。

「それは、判ってます。ダメなら客分としてついていこうかなと考えてますよ」

話していると、村の入り口辺りが騒がしくなった。

「お、来たか」

商隊の人たちだろう。

「まず、村長のところにあいさつに行くから、紹介するのは明日だな」

何日間か滞在するらしく、一日目は村長のところに行きあいさつ。その後は歓迎の宴会が開かれることになっているらしい。本格的に動き出すのは明日以降だとか。

「分かった。また明日だね」

そう言つてギルドを出ると、広場の方に何台かの荷馬車と護衛らしい武器を持った人たちが見える。

少し見ていたが、興味のわく物がなかったので、くるりと背を向ける。

暇になったから、鍛冶屋の爺さんのところに行こうかな。

宿屋に帰ってきたら、そこは戦場でした。

いや、普段から飲みに来て騒ぐ人はいるよ。騒ぐ人はいるけど、羽目をはずす人はいないのだ。理由としては、次の日も仕事があるからだ。しかし――

「がはははは」

「おゝい、酒はまだか」

「はいはい。ただいま」

「俺は、俺は」

いつもの倍以上騒がしい。働いている人も倍以上いるのだが、フル回転といった状態だ。

「あ、ビリノアちゃん。いつもの席空いてるよ」

前から働いているお姉さんに声をかけられ、カウンターの定位置

に案内される。

「はいよ、いつもの」

即座に、メアリさんが夕食を出してくれる。メアリさん特性野菜たっぷりスープとステーキ、パン、デザートの旬のリンゴ、これがいつものメニュー、僕の中での最強組み合わせ。

「いただき——」

「ガキがこんなところに来てんじゃねーよ」

横から伸びてきた手が、ステーキ皿をかつさらって行きました。

「さっさとお家に帰りな」

冒険者の一人がビリノアちゃんにからみ、食べ物を奪ったのを見て、あたしはまずいと思った。

あの子は、食べ物にこだわる。あたしに酵母液の作り方を教えてくれた時も、自分の為って言ったことや、『メアリさんの料理とても美味しいので好きです』と、満面の笑みを浮かべて言ってきたことからも分かる。

そんな彼女が食べ物を取られたら、どんな反応をするか……

「めいわくになります。おもてにでなさい」

「てめー、ガキのくせに」

「でろ」

声が平たんになっている。こいつは本格的にまずいね。

「あー、ビリノアちゃん」

悲劇を防ぐため、声をかける。首だけを動かしてこっちを向いたビリノアちゃんの半眼に、多少ビビりながら言葉を繋ぐ。

「新しく用意するから、殺さない程度に手早くやってきな」

その言葉に、こくりとうなずくことで答えたビリノアちゃんは、男とともに外に出て行った。

ま、すぐに帰ってくるだろうから、作り直してやろうかね。置き去りにされていたスープ皿を回収しながら、そう考えていた。

昨日は最悪だった。

朝と昼は特にこれといったこともない、普通の日だった。

問題は夜。人のご飯をかつさらった上に、暴言まではかれたのだ。まあ、身の程を知らせてやったので、ベッドの上で後悔しているだろうが、そんなこと知った事じゃない。

いつまでもイライラしていても仕方ない。今日は、商隊の責任者に紹介してもらうのだ。気分を切り替えていこう。

そう思い、いつもの朝と同じように行動し、ギルドに向かいマスタ―に声をかける。

「マスタ―」

「お、来たか。じゃあ行くぞ」

すぐに連れてってもらい、商隊と冒険者の責任者を紹介されたのですが……

「お前、俺と戦え」

……はい？

第10話 対人戦闘（前）（後書き）

誤字、脱字、指摘、感想、お待ちしております。

第11話 対人戦闘（後）（前書き）

戦闘描写がうまくいかない。

第11話 対人戦闘（後）

「もう一度言う。俺と戦え」

なにを言っているんだこの人は、と言うのが周りの考えだろう。

証拠に、マスターと商隊の責任者の方も、怪訝な表情をしている。

「……理由を聞いても？」

僕がそう訊くと、すらすらと答えだす。

「昨日のことだが、俺たち護衛団の一つ、『風人』のリーダーが怪我を負って、戦線離脱を余儀なくされた」

「あー、そんなこともありましたね」

責任者「アラドさん」が、思い出したように言う。昨日痛めつけた奴のことだろう。

「あまり素行のよろしくないやつらだったが、戦力としてはそこそこ頼りになったんだ。そいつらが、リーダーの負傷を言い訳に護衛を降りると言ってきた」

怪我による途中辞退は、違約金を払わなくて済むうえ、護衛料の半額は支払われるという契約になっていたらしい。金額が良かったため受けた護衛の仕事だったが、予想以上につまらない仕事だったためやる気が落ちていたらしい。

「リーダーの負傷は、渡りに船だったと……」

「まあ、そうだな。後、こんな辺鄙なところにいるのは嫌だから、県都までタダで乗せてけとも言っていた」

図々しい奴らだ。

「まあ、そんなことでもいい。ただ、護衛に穴があいてしまったのだ。その為、戦力となるものならぜひとも欲しい」

「そうですね、私どもとしても戦力になるのであれば、ぜひとも雇って差し上げたいのですが……」

お金の心配だろうか？ アラドさんが口ごもる。賃金は最低限で良いと伝えると、それならばぜひと言ってくれた。

「賃金はどうでもいい。俺が気にしているのは、お前の実力だ」
僕のランクは、Fと言ったからかな、実力が疑問視されているみたいだ。

「余裕のあるうちなら良いが、余裕のないところに、実力が伴わない物を連れて行っても、足手まといになるだけだ。故に、実力を見せてほしい」

その為に一番簡単な方法として、戦闘をしることでした。当たり前かと思い、模擬戦を受けたところ、前回の冒頭のような状況になったのです。

……鬱だ。

うちのリーダーも、困ったことだ。

話を聞き、メンバーとともに広場についた時、正直そう思った。なにせ、はたから見ると、大人が子供に向かって剣を突き付けている、そんな光景にしか見えなかったからだ。

「ほう……」

隣で見ていたメンバーの一人が、関心の声を上げる。

「あの子、強いな」

？ 見ただけで分かるのだろうか？

「ああ、何となく感じるんだ。あいつは強いと」

歴戦の戦士である、アルベルトの感が働いたのだろう。

「そうか？ そうは見えねえけどな」

同じく戦士であるサラは、なにも感じてないようだった。

「リーダーが本気を出したら、一撃だろ」

「ふむ、じゃあ、賭けるか？」

「よっしゃ、乗った。今日の夕飯で良いな。私はもちろんリーダーだ」

「ふむ、俺はあの女の子だな」

そう言って、二人は私の方を見てくる。

……もしかして、私も賭けると？

うなずく二人を見て、仕方なく自分の意見を出す。

「……では、引き分けて」

どうしようか？

正直な今の気持を表すと、こうなる。

チート能力を全開で使えば勝てるだろう。

たとえば、無差別広範囲魔法を使うとか。

だが、それは出来ない。と言うか、魔法全般を使うのは、よし方がいい。

と言うのも、僕の使う魔法はチート過ぎて、初歩の攻撃魔法が、中級の上の威力を持つのだ。防御や、補助ならともかく、そんなものを村の中でぶっ放すわけにはいかない。となると、剣のみで戦うことになるのだが……

「……勝てる気がしねえ」

身体能力は僕の方が上だろう、しかし、それだけだ。純粹に剣の腕前でいったら、相手の足元にも及ばないだろう。生半可な攻撃じや効かないだろうし、打ち合いになっても、大ぶりの攻撃にカウンターを入れられるだろう。

相對して、理屈じゃなくそう感じた。

ならば……

「行きます」

少女の言葉とともに、俺にかかる圧力が増す。

「来い」

感覚で分かる、この少女は強いと。だが、構えや視線の動きから、経験不足であるということも分かる。そして、彼女はそれを、よく理解しているのだろう。

「一撃に賭けるか……」

「そうするしか他に方法がないからね……」

良い覚悟だ。ならば、こちら全力で受けてやるか。

「……そういえば、名前を聞いていなかったな」

「ビリノア・バクスター。鍛冶師兼駆け出し冒険者」

「フハハハ、駆け出しか。しかも兼任か」

楽しすぎるぞ。こういうことがあるから、冒険者は止められない。

「では、来い、ビリノア・バクスター。お前の攻撃、『斬鉄』のアレスが全て受け止めてやろう」

相手の言葉を聞いて、正直安堵した。

僕の全力の一撃は、全速で近づいてからのなぎ払いだ。

威力はバカみたいに高いが、至極読み易いもので、よけようと思えば簡単に避けられる。その上、放った後隙だらけになるため、非常にリスクなものとなっている。実戦では使い物にならない。だけど最大最強の一撃。

「今度こそ行きます」

少し距離を取り、2、3回深呼吸して息を整え、しっかりと剣を握り直す。

羽を使い、風を纏い宙に浮く。と言っても地面から2、3センチぐらいだ。

「はあああああ」

動き出した瞬間にはもう、トップスピードに乗る。普通に走るのよりも、遥かに早い。

そのスピードのまま、相手に肉薄する。

狙うのは、胸。最も広く、最も狙いやすいところだ。

「うおおおお」

と同時に、読まれやすい場所でもある。

案の定、相手も読んでいたのだろう、こちらの振るう剣に合わせ、剣をぶつけてくる。

こちらの剣にすべての力が集約する前に剣をぶつけてくるあたり、非常に上手い。

だが、そんなの関係ない。こっちは振り切るまでだ。

「うおおおおお！」

裂ぱくの気合を込めて振り切ろうとするが、相手も同様に押し返そうとしてくる。技や早さではない、力と力の勝負になる。が、しかし――

『ビキン』

「なっ……」

「おわっ」

無茶な使い方をしたせいだろうか、模擬戦用に借りた刃引きされた剣がへし折れる。

相手の剣もへし折れたみたいだが、なぜかボロボロに砕けている。

「あー、両者戦闘不能で引き分けて事で良いか？」

「今回は、実力を見るだけだったからな。別に良いぜ」

「僕も別にかまわないです」

引き分けでも大健闘ですよ。正直分の悪い戦闘でしたから。

戦うにしろなんにしろ、チート能力だけではやっていけないということが確認できた、実りのある戦いだった。

「私の勝ちですね。今日と明日の夕食、ごちそうさまです」

「ふむ、今日は俺が奢ろう」

「くっそー、リーダーが本気を出せば……」

「模擬戦といっただろ。そうそう本気を出さんさ」

「それぐらいは、見抜いて欲しかったですね」

「くっそー」

見世物や賭けの対象にされていたことは、あんまりいただけません……

初依頼

その後、正式に護衛の依頼を受けました。

県都に便乗していくためなので、依頼料は最低限度にしてもらっています。

出発は、7日後とのことなので、チートに頼っている技術の底上げでもしようかな……

その前に、『風人』たちへの闇討ちを執行しようかな♪

第11話 対人戦闘（後）（後書き）

誤字、脱字、指摘、感想お待ちしております。

第12話 護衛の実態と疑惑？（前書き）

執筆の時間がなかなか取れない。

第12話 護衛の実態と疑惑？

あつという間に七日間が過ぎ、とうとうの出発の日となった。

その間、僕が何をしていたのかと言うと、技術の底上げのため、アレスがリーダーを務める『悠久』のメンバーの戦士である、アルベルトさんとサラと戦闘訓練したり、魔術師であるダイさんと勉強会をしたり、村の鍛冶屋で鍛冶仕事をしたりしていた。無論その間にリリアちゃんと遊んだり、メアリさんと料理開発をしたり、自分の好きなことをする時間を取っていた。

「ビリノアちゃん、また来てね。絶対来てね」

「うん。向こうで落ち着いたら、また来るよ」

気休めではなく、本当にまた来ようと思っている。なにせ、この世界に来て初めて来た村で、はじめて人とかかわり合いを持った所である。時々常識はずれなことをする僕に対して、笑ったり怒ってくれたりした、優しい人たちが住むここは、この世界での故郷と言っている所となっているのだ。無論、リリアちゃんと会いたいって言うのもあるけどね。

「部屋の方は、わたしがちゃんとしとくから」

涙目でそういうリリアちゃんと抱き合う。

実際のところ、僕の部屋に転移陣を置いてあるから、向こうでの拠点が決まればいつでも気軽に来られる。そのことは説明したのだけれど、それでもちよつとの間は会えないのは寂しいらしいのだ。

「それくらいで良いだろ。そろそろいかせてやりな」

そう言つて、メアリさんがリリアちゃんを引き離す。

見送りに来てくれた村の人々に向かって、万感の思いを込めて、
こう、あいさつする。

「いつてきます」

「好かれているな、村の連中に」

「まあね。いろいろやったし。第二の故郷と思っているよ」

アルベルトさんが話しかけてきたのに、軽く答える。

今僕たちのいるところは、商隊の一番先頭の荷馬車の御者台である。アルベルトさんが手綱を持ち、その隣に僕がちょこんと座っているのだ。

僕は、『悠久』の暫定メンバーとしてここにいる。他のメンバーは、リーダーで前衛タイプのアレス（ランクB）。同じく前衛タイプのアルベルトさん（ランクB）とサラ（ランクC）。後衛タイプで、副リーダーを務めるダイさん（ランクB）の4人である。

今回の護衛団には、四つのパーティーが参加している。

まずはBランクパーティー『悠久』。Cランクパーティー『戦人』、全員前衛タイプの5人組で、戦闘能力だけで言うならBランクに達しているとのこと。同じくCランクパーティー『赤兎』、全員獣人で固められた6人組、夜目が利くため、夜警の任務に就くことが多いため、現在真ん中あたりの荷馬車の中で就寝中。そして、Dランクパーティー『風人』、前衛3人、後衛2人とバランスのとれたパーティーだが、個人個人で勝手に動くため、ランクが低いパーティー。以上が、アルベルトさんから聞いた、護衛団についての情報である。

「んー、問題は『風人』かな」

「うむ、そうだな。だが、いったん降りるというのを撤回して、はじめに頑張っているようだぞ。その辺は、評価できると思うが」

「……」

ぼこぼこにしたリーダーを無理矢理治して、パーティー全員にちよつと高町式のOHANA SHIしてあげたら、実に素直に納得してくれましたよ。うふふふふ♪

「ビリノア、その笑い方不気味だからやめろ」

「ふえ、声出てました？」

「ああ」

うわ、恥ずかし。

「えーっと、僕は一体何をすればいい？」

「誤魔化したな。まあいい。俺たちの仕事は、前方警戒だ。ひたすら前を見て、魔物が来るのを警戒する」

「前を見ていればいいのか？」

「ああ、左右の警戒もしてほしいが、今回は前だけだ。で、魔物が出たらお前に渡した笛を吹く。その後迎撃だ」

笛を吹くのは、魔物が来たと商隊全体に知らせるためだ。それにより、商隊全体を止まらせて、追突を防ぐとともに、荷馬車に簡易結界を張って魔物に備えるとのことだ。

「そんながあるなら、常時展開してれば護衛を雇うことはなくなるんじゃないか……」

「無理だな。簡易結界は、一般の人でも張れるよう作られているが、魔力の関係上長時間は張れないうえに、解除しない限り動くことが出来ない」

「……欠陥品？」

「俺にはよくわからん。ダイに聞いた方がよくわかると思うぞ」

あー、バリバリの戦士であるアルベルトさんじゃあ、細かいことは分からないか。後で、ダイさんにきいてみよう。

「でだ、馬車溜りに着いたら、設置式の結界を張る。魔術が使えるお前も駆り出されるから、そのつもりでいると良い」

「うい」

にしても平和だ。

一応、話しながらでも警戒はしているのだが、特に魔物の気配はない。

荷馬車も、整備されている道と、簡単なサスペンションのおかげで、そんなに揺れない。荷馬車全部にサスペンション機能が付いていると知った時には、なぜと思ったものだが、理由を聞いて納得した。

「商品を保護するための投資です」

当たり前のことだったな。

「ふむ、つまらなさそうだな」

少しの間、考えに没頭していたのを退屈していると判断したのか、アルベルトさんがそうたずねてくる。

「えーっと、正直言えば……」

草原の景色は単調で、荷馬車の揺れも穏やか。前方警戒とは言うものの、魔物の出る様子はない。ちなみに天気も良く、心地よい陽気だ。

「こんな状態じゃあ、眠くなりそうです」

「ま、確かに。護衛という仕事は、実入りは良いが退屈な仕事だからな」

「そうなんですか？ 平原にはかなり魔物が生息しているはずだと思うんですが……」

「まあな、たくさん生息している。だが、商隊を襲うことはほとんどない」

「なんで？ 一人でいた時は、かなりの確率で襲われたんだが。」

「魔物は、なぜかは知らんが、大人数のグループをあまり襲わない」
「は？」

「以前、3ヶ月の長期護衛を請け負ったんだが、その間に襲撃は5回しかなかった」

「少な！」

「あの村まで行くまでも一回も襲撃がなかった」

「マジか、これは失敗したかな……」

「まあ、例外もある。トチ狂って襲ってくるやつがないわけじゃあない。後、軍隊は確実に襲われる」

「軍隊？」

「ああ、何故かは分からん。魔物は、邪神の力の影響を受けたものだから、血と争いごとにひかれるというのが一般的な説だ」

「それにしても少しおかしい。」

血と争いを好むなら、無差別に襲ってくるはずである。それなのに、商隊は襲わないとか、戦う準備がある軍隊は襲うとか、恨みの

対象になるように個人は襲うとか、よくわからない行動をしている。
物語なら、ご都合主義的なものとして考えられるが、ここは現実にある世界である。物語のような世界とはいえ、多くの人々が生きて生活している現実世界なのである。

まるで、『何かに操られているような』魔物たちの行動。

「まさかね……」

戦争の回避のために、魔物が生み出されているってことないよね。
しかも、邪神じゃなくて、レムリアが生み出しているなんてことは

……

第12話 護衛の実態と疑惑？（後書き）

誤字、脱字、指摘、感想お待ちしております。

第13話 一国一城の主へ(1) (前書き)

スランプ中です。

第13話 一国一城の主へ(1)

「いらっしやいませ。ようこそ商工ギルドへ。本日はどのような用件でしょうか？」

しばらく待たされた後、通されたカウンターで待っていたのはメイド服のお姉さんでした。

「商売がしたいのですか？」

本当に何事もなく京都ブリジットに着き、アラドさんから報酬を受け取る時に相談してみたのだ。『何処かに空き店舗はないか？』と

「いえ、商売じゃなくて、本業の方をやるうと思ひまして……」

「本業……ですか？」

「ええ、一応本業は、鍛冶師兼錬金術師ですから」

「え？」

アラドさんと一緒にいつてきた『悠久』のメンバーは、始め驚いたような声を上げたが、すぐに二通りの表情に分かれる。なにを言っているんだという表情と、なんとなく可愛い物を見ている微笑ましい表情に。

解っていたことだが、失礼な反応が返ってきた。

鍛冶師と錬金術師を両方職業としている物はそこそこいるが、そのほとんどが歳を取った人なのだ。若い人もいるのだが、僕みたいには十代、しかも見た目は十代に行っていないような子どもでは、両方はおるか片方ですら見習い以下でしかないように思えるのだろう。それゆえに二つの表情、うそをつくことに対して顔をしかめると、背伸びする子どもを見る物に分かれたのである。

「証拠は？」

「これです」

腰につけていた剣とナイフを取り出し見せる。錬金の場合は、炉を使って実際に作っているのを見せないといけないため、今回は鍛

冶の成果だけを見せる。

「失礼」

そう言っ、アラドさんは剣を手に取る。鑑定スキルを持つているのか、少しの間じつと見つめていたが、すぐに剣を返してきた。

「……貴女ほんとに14歳ですか……？」

「失礼な」

14歳ですよ、からだは。精神的には大人ですが。

「どういことだ？ アラド」

アレスの問いに対して、アラドさんは僕の持つている剣を渡すように言ってくる。

渡された剣を、アレスは構える。流石に室内では、振り回すことは出来ないで構えるだけである。

「うん、普通だな」

そう感想を言い、剣を返そうとしてきたのだが、横からサラが掻っ攫うようにして奪う。

そして、同じように構え、同じ結論に達したのか、一つうなずき隣にいたアルベルトさんに剣を渡す。アルベルトさんは、構えるのではなく刀身を一瞥して返してきた。

「確かに……お前14歳か？」

アルベルトさんまで……酷いですorz。

なんか落ち込んでるビリノアの奴は置いといて、改めてアラドに聞く。

「で、この剣がどうしたって言うんだ？」

普通に売っている一般的な剣よりは、良い物ではあると思うのだが……

「解らなかつたのですか？」

意外そうに聞くアラドに対して、先ほと思ったことを伝える。

「アレス、これぐらい判ってくれないと、安心できないのだが……」
ん？ アルベルトは解っているのか？

「はあ、説明しようか。彼女の武器は、ごく普通の剣だ」

それは、解っている。隣で聞いているサラも解っているのだろう、うなずいている。

「普通、店で売られている一般的な剣は鑄造だ。その方が安く作れるし、性能もほぼ同じ物が出来る」

それは知っている。

「しかしだ、あの剣は鍛鉄で出来ている」

「え？」

「長さ、幅、厚さ、重さ、重心の位置まで、完璧に基本に沿った造りをしている武器だ。しかも、鍛鉄って事は、鑄造製のものよりも格段に耐久性が高い」

「使いやすいと感じませんでしたか？」

「「そういえば……」」

「専用武器には劣りますが、誰でも使いやすいように作られています。品質も高く、A-という評価です」

「マイナスとはいえ、Aランク武器かよ。ごく普通に使っていたぞ。つうか、本当にこいつが作ったのか？」

「鑑定の結果、間違えなく彼女の作ったものだと出ました」

俺とサラは、未だに落ちこんでいるビリノアの方を同時に見る。

「「お前、本当に14歳？」」

「……」

お、さらに落ち込んだ。

なんとか持ち直した僕は、改めてアラドさんに尋ねる。

「それで、ですね。何処かに住居兼鍛冶場兼錬金場ついでに店舗になっている物件ありませんか？」

「……欲張りですね……残念ながら、その手の情報は持っていません。持っていたとしてもお教えすることは出来ないんですよ」

「え？」

「我々商会は、自分たちの持つ店舗や商隊の管理・運営をしている

だけです。当然、運営しているのですからつぶれる店舗も出てきますが、そういった店舗は、商会ではなく商工ギルドが管理するのですよ」

「商工ギルド？」

「はい。このように大きな街にある組織です。冒険者ギルドのように統一されたものでなく、街ごとに違った組織ではありますが、この街にある商工に関係ある物を全て管理している組織ですよ」

街ごとって、不便なような気がするが、自然発生したもので、その街その街でルールがあるということを書いて、納得することにした。

「そこに行けば、店舗が借りれるのか？」

「それは、難しいですね。まず、店舗を借りるにはそれ相応のお金がかかります」

それは、大丈夫だろう。ゲーム内通貨が使えることが分かっているため、お金は無限に近いくらいある。あまり使おうとは思わないが、今回は大いに活用させてもらう。

「買い取りだともっとお金がかかるのですが、今回は良いでしょう。もう一つの問題は、保証人が必要だということです」

「保証人？」

「ええ。せっかく貸した店舗を、犯罪に使われたりするのはごめんですから、信用できますよと言う意味で、保証人が必要なのです」

それでも、抜け穴を見つけて犯罪は起こりますが、と続けるアラドさんだが、僕は頭を抱えていた。

保証人なんていないぞ。

商人なら、商会に所属して商売をしているのなら商会主が、職人なら、その親方が保証人になってくれるのであるうが、ただ一人で転生してきた僕にはそんな人はいないぞ。

「ちなみに、私はダメですよ。商会の規則で禁止されていますから」
最初で最後の砦はなくなつたようだ。

「マジでどうしよう」

どうしようかと頭を悩ませていると、アレスが肩に手を置いてきた。

「俺がなってやろうか？ 保証人」

「はい？」

「だから、保証人になってやろうかって言っているんだが」

なにを言っているんだこの人は。

名無し草生活の冒険者が、保証人なんてありえないだろ。

「あり得ますよ。ある一定レベル以上の冒険者であるならば、商工ギルドでも保証人として認めています」

「で、俺とアルベルトとダイはそのレベルを超えている。そして、この場合だとリーダーの俺が保証人になることになる」

ふむ、そういうことなら頼んでも良いかな。

「で？ 見返りは？」

「俺たちの専用武具と、拠点として家を貸してほしい」

マジックアイテムも作れるんだらうとの言葉に、同意を返しておく。

ふむ、条件としては悪くない。

武具を作るのなら、時間がかかるが面倒ではない。拠点として家を使いたいというのなら、大きめな家を借りれば良いだけだろう。

「保証人の件、お願いしますね」

「任せとけ」

「拠点として使うなら、お金を取りますから」

「う、安めをお願いします」

食費ぐらいは入れてもらいましょうか。武具自体は、素材さえ取ってきてくれたらただで作ってあげましょうかね。

そんなことを話しながら、商工ギルドに向かい、冒頭に帰るというわけです。

第13話 一国一城の主へ(1) (後書き)

誤字・脱字・指摘・感想お待ちしております。

第14話 一国一城の主へ(2) (前書き)

いまだ調子が上がらず……

第14話 一国一城の主へ(2)

「ご用件をどうぞ」

にこやかに尋ねてくる、メイドのおねーさん。

「えーっと、店舗を借りたいと思ってきたんですが……」

「身分証の提示をお願いします」

身分証明としてはこれしかない、冒険者カードを提示する。

「ビリノア・バクスターさん、確認しました。新規の方ですね。店舗は借りるには、保証人が必要なのですが……」

「これを」

アレスに書いてもらった、保証人証明書を差し出す。

「……確認しました。店舗を借りたいとのことですが、どのような物がよろしいのでしょうか」

「鍛冶・錬金工房と、簡単な店機能。住居付きで。あと、保証人が拠点として使いたいとのことなので、そこその大きさが必要なんです」

「うーん、鍛冶のみ、錬金のみで大きめの所なら空いているところはあるのですが、同時に言うところはないですね」

やはり、そんな都合のいい物件はないのか。

ちなみに、鍛冶と錬金は全く別物であり、炉や道具など全然違う物を使うのだ。

一部を除き、道具の使い回しが出来ないし、炉を二つ入れるとなると、スペースは取るし、熱は倍どころか、二乗になる。別々の部屋にしておいた方が効率的なのである。

「方法がないわけではありませんよ」

考えこんでいる僕に、メイドさんがいくつかの提案をしてくれた。
「まず、鍛冶工房と、錬金工房の二つを借りるという方法です」

「？ 一人で、二店舗って借りれるの？」

「可能です。ただし、二店舗を持つとなると、二店舗分の料金が発

生します」

ついでに、工房同士が近くないといけないのだが、隣り合っているところか、近くというところもないらしい。

「ダメじゃないですか……」

「どちらか片方だけ借りて、増設するという方法がありますよ」

「二部屋になるだけの広さがない」

大きめの物件の間取りを、空間投影術で投影してもらって見ているのだが、どれも部屋を区切り、炉を置くと、作業場が狭くなるのだ。

「それならば、大きな物件を借りて、工房に改造してしまうというのはどうでしょう」

え？ そんなこととして大丈夫なの？

「問題ありません。前例もありますし」

「前例？」

「はい。最近ですと、倉庫を借りて、そこをレストランに改装した方がいらっしやいます」

「そうなんだ……」

「なんに使うかを明確に申請していただければ、どうするのも自由です。ただ、改装代等はそちらの負担になりますし、改装後の建物に対する苦情は一切受け付けません」

これは当たり前か。元々その用途で作られたものではないのだから、何らかの問題が出てくるのは当然だろう。そのことで文句を言われても、改装したのはそちらなのだから、そちらに責任があり、うちでは対応できないということか。

「それじゃあ、何かお勧めの物件ってあります？」

「そうですね……こちらなんてどうでしょう」

そう言って見せてくれた間取りは、一階部分は広い一部屋と台所、二階部分は広い部屋から階段で上がったところにある十二の小部屋に分かれているところと、台所の奥から行ける少し広い部屋と二つの小部屋からなっていた。後、食糧庫として使っていたのか、広め

の地下室まであった。

「これ、元酒場兼宿屋ですか？」

「はい、少し郊外にあったため、あまり実入りが良くなかつぶれたところですよ」

「そうですか……」

広さ的には問題ない。どころか広すぎるくらいか。酒場スペースを二部屋に分ければ、十分な工房スペースになる。

二階の小部屋が多いというのもいい。『悠久』のメンバーが寝泊まりしても部屋が余る。台所や、居間を改装で作ってもいいだろう。さらに地下室があるというのもいい。鉱石や原石、作ったもの等も置くことが出来るスペースとなるだろう。出来るなら拡張したいところだ。

郊外とのことなので、市や、ギルドからは少し離れているが、些細な問題だろう。

「料金はどのくらいになりますか？」

「毎月、銀貨4枚ですね」

思ったより安い。

「郊外ですから、中心部よりはお安くなっていますよ。あと、買い取りたいというのであれば、金貨12枚です」

「むう……」

とりあえず、返事は保留した。

実際に見てみると、決めかねると言ったら、どうぞ見に行ってくださいと言いい、案内まで付けられた。

「見に行く前に、寄りたいところがあるんですけど」

「かしこまりました」

何故か、執事の格好をした男ですよ。カイゼル髭がダンディーさを引き立てている、ナイスミドルさんです。

とりあえず、お世話になる宿へ行く。

『悠久』の御用達の宿だそうで、僕の分の部屋も取ってくれるそ

うなので、宿の位置確認と、メンバーがいたら、物件見学に付き合ってもらおう。

「ほう、ここが候補の所か……」

「その通りでございます」

「へえ、まだ結構きれいじゃない」

「築10年でございます。酒場として営業していたのは、2年半程でございます。その後は、私どもが定期的に管理しております」

「へー、って、ここ庭付きなのか？」

「はい。郊外という条件もございまして、少々広めの庭がございます。井戸もありますので、水は使いたい放題でございます」

「井戸があるというのは、評価が高いですね」

「うふふ、お風呂、お風呂」

「もちろんございますよ。薪で焚くタイプのものでございますが」

「おし、じゃあ中を見に行くぞ」

「「「おー」」」

「かしこまりました」

「ふう」

テンションの高いメンバーたちを横目に、僕は深くため息をつく。宿に行き、ちょうど全員居たメンバーに声をかけたところ、全員二つ返事でついてきたのだ。

来る途中からテンションが高かったが、ここにきて最高潮になったのか、やたらとノリノリである。

僕が借りるのであって、君たちが借りるわけじゃないんだが、と言う突っ込みは完全に無視される勢いである。

「おい、ビリノア。早くしろ」

いつの間にか、入口にいるアレスたちが急かしてくる。

「……いや、借りるのは僕なんですがね……」

予想通り突っ込みは、むなしく空中に消えていった。

「……」

「……」

「……」

「……なにもない……」

ガランとした建物内の様子に、四人のテンション駄々下がりである。

「当たり前だろう」

「左様にございます。管理にもお金はかかりますゆえに、家具等を処分することは当たり前かと」

店の設備が残っていることの方が珍しいのだ。

「安く物をそろえることが出来るところは、紹介してくれるけど……」

……

「設備自体は、自分たちで用意していただくことになっております」
「うわぁ」

今更になって、設備投資に莫大なお金がかかることに気付いたのだろう、メンバーの顔色が変わる。

そんな4人を放っておいて、確認したかったことを執事(?)さんに聞く。

「地下室あつたよね」

「ございます」

「広さは？」

「さほど広くは……見ていただいた方が賢明かと」

案内してもらう。

元キッチンだった所の奥から入った地下室は、畳六畳分くらいの広さの部屋だった。

「鉱石等を置くには、少し狭いな……広げることって出来ます？」

「敷地内でしたら可能でございます。固形化の魔法をかけることが前提になりますが」

ふむ、問題ないな。多分自分で出来るだろう。出来なかったら、ダイさんに頼むという方法もある。

「それでは、全体を見て回りましょうか」

執事（？）さんの案内で、復活した四人を連れ、建物内を見て回る。

「ねえ」

「？」

その途中で、サラが話しかけてきた。

「なんか、ものすごくお金が掛かりそうだけど、大丈夫？」

「ふ、問題ない」

「どっから出したのよ……」

サングラスと白手袋を装備し答えると、サラから疲れたような突っ込みが入る。

むう、解らんか。やはりデスクの上で手を組み、口元を隠さないと無理があるか？

「んなことどうでもいいわよ。で？ 本当に大丈夫なの？」

「本当に問題ないぞ」

お金は、カンストしているからな。全部使えば、世界恐慌が起こるだろう。

第14話 一国一城の主へ(2) (後書き)

誤字・脱字・指摘・感想お待ちしております。

第15話 一国一城の主へ(3) (前書き)

忙しすぎて、なかなか書けない……

第15話 一国一城の主へ(3)

物件見学ツアーの後、僕と『悠久』のメンバーは執事(?)さんと別れて宿屋に戻った。

宿に入り、メンバーと別れて一人部屋の中でくつろいでいると、ノックの音とともにアルベルトさんの声が聞こえてきた。

「ちよつと良いか？」

「んあ、良いですよ」

扉を開けると、そこにはメンバー全員がそろって立っていた。

「どうしたんです？ お揃いで」

「ちよつと話があつてな」

ん？ なんだろう？

「工房兼店についてなんだが……」

「ん？ あそこ気に入らなかった？」

自分としては、かなり気に入ったので、借りて改装しようと思っ
ていたんだが……

「いや、俺たちも気に入ってるぜ」

アレスの言葉に、さらに首をかしげる。

「簡単に言うぞ。俺たちもあそこが気に入ったから、買い取りを頼
みたいんだ。もちろん、全額とは言えないが、金も出す」

金を出すとまで言うことは、相当気に入ったようだ。借りるだけ
のつもりだったが、買い取りをしようかな。

「あそこ、どれくらいの金額か解っている？」

「そうですね、月に銀貨6枚、買い取りは金貨20と言ったところ
じゃないでしょうか？」

「月に銀貨4枚、買い取りは金貨12」

「思ったより安いですね……」

郊外であるということと、ここでの酒場兼宿屋としての実入りが
期待されない、というのが安い理由だ。

以前、一家四人が銀貨2枚で一ヶ月暮らせるという説明をしたが、これは正確ではない。最低限の食費としてこれぐらいであるというものだ。

国に納める税金や、持ち家でないなら家賃などの様々な出費があるために、最低限月に銀貨20枚は稼がないと、暮らしがかなりきついものになる。

この基準は、飲食店にはかなりきついものだ。中心部に店を構えている所でも、よほどの人気店でもない限り、ぎりぎりのところと言ったところであり、ましてや郊外では非常にきついであろう。

また、店舗の改装にはお金がかかる。商工ギルドでいくつかの例を聞いてきたが、そのほとんどが簡単な改装で、僕が望むような改装ではなかった。それでも結構な値段がしているので、望み通りの改装をしたらかなりの金額になるだろう。

「？　　こういう風の吹きまわし？」

「はつきり言えば、この街を拠点とすることを決めたってことだな」
やはり判らない。

「建物借りたら拠点として提供するというのは、保証人をしてもらう約束だったはず……」

「この街での拠点としてだ」

「だったら、お金を払わなくても……」

「聞いてなかったの？　この街のじゃなくて、この街を、って言ったの」

そういうことか。

「ここを、本格的な活動拠点にするって事？」

「ああ、今まで、適当に街や国を渡り歩いていたが、そろそろ地に足を着けてやろうと思っていたんだ」

「渡りに舟ってやつね」

僕の問いに、アレスとサラが答える。

ふむ、そうになると、本格的に住むところにしたいということだな。
「まあ、良いですよ。お金の方は、そう多く出さなくてもいいです

よ」

「いえ、そういうわけには……」

ダイさんが、申し訳ないという感じで言っのをさえぎって、言葉を続ける。

「定期的に、鉱石採集の依頼を格安で受けてくれれば良いです」

「そういうことなら、了解した」

アルベルトさんの返事を聞き、具体的な話に移って行った。

次の日――

「では、買い取りでよろしいですね」

「はい」

「お支払いは、どうなさいますか？」

「はい」

金貨で12枚が入った袋を、無造作にテーブルの上に置く。

話し合いの末、僕が金貨8、向こうが4だすことになった。改装代は、一階部分と地下室、二階の居住スペース分を僕が、二階の宿屋部分を向こうが出すことになっている。

「……確認しました。書類をお持ちしますので、少々お待ちください」

ちなみに、商工ギルドには登録済み。職種は、鍛冶師兼錬金術師。「こちらになります。ご確認のうえ間違えなければ、こちらに署名をお願いします」

十数枚の書類を渡される。

チート能力の為、文字は簡単に読めるし、転生前に習得していた速読のおかげで、アツという間に読み終える。

「？ 土地に関する書類がない」

「何か不備でも？」

「いえ、あの建物が建っている土地の所有権って……」

「基本的に、土地の所有権は国ですが」

なにを当たり前のことを、といった表情でおねーさん（昨日と同

じ人だった）が見てくる。

どうやら、税金は土地の使用料といった形で取っているようだ。その土地を使いどのくらい儲けているかということを調べ、それをもとに税金を決めるといった形らしい。

「どうやって調べてるの……」

レムリア様
「神の御技です」

「えっと……」

レムリア様
「神の御技です」

要するに、気にするなっただろう。

「……それですね、良い改装業者の紹介と、鍛冶、錬金関係の道具などを売っているところの紹介をお願いしたいのですけど」

「改装業者については、専属の所へ紹介状を出します。後者の方は、いくつかあるので、地図をお渡しします」

特に問題がなかったため、署名を済ませて地図と紹介状をもらう。確認しました。手続きがありますので、受け渡しは五日後となります」

「解りました。連絡は、『迷風亭』でお願いします」

「かしこまりました」

用件を終えて外に出ようとすると、雨が降っていた。にわか雨といった様子ではなく、しばらく降り続きそうな勢いである。

「どうしよう、雨具を持っていないぞ」

と言うか、この世界に雨具って何があるのだろうか？

そう思って、周りを観察していると、ほとんどの人が何か布を頭からかぶっている。

？ 鑑定モード開始。

『名前：防水加工布 レア度：0 備考：なるべく細かく編んだ布に、ロウを塗り込んだ物』

雨合羽の簡易版と言ったところか。となると、傘的な物があるか

もしれんな。

「……そうだ」

ふと、頭に浮かんだ物があり、ポーチの中を探る。
すぐに目当ての物を発見、取り出す。

「レムリアの傘」（祝福付き）」

某青猫のまねをしながら取り出したのは、一本の赤い傘だ。

ゲーム内アイテムで、イベントをクリアすれば手に入る特殊武器である。

そう、武器なのである。

攻撃力はそう高くないむしろ低い方だが、特典として、HP・TPの回復5%増、特殊スキル『空中浮遊』の習得があった。

その名の通り、空中に浮くだけのスキルで、自由に動けるのだが、移動速度は歩くのの二分の一と言うものである。

それでも需要はかなりあり、パーティー全員が装備して、目的地までふよふよと飛んでいく姿は、非常に笑えたものである。

……どうでもいいことだった。

とりあえず、今回は傘としての機能を使うだけだ。

広げると赤い布地に、白いレムリアの姿が描かれている。ゲーム内で見たものと全く同じだ。これで雨にぬれずに済むだろう。

「さてと、まずは改装業者。それから道具屋に行つて、鍛冶師、錬金術師へあいさつ回りに行こうかな」

今後の予定を立てて、雨の中歩きだした。

閑話休題

ちなみに、傘の特典の、回復5%は付いていなかったが、空中浮遊は付いていた。

後日、ためにしに飛んでいた所、スカートだったため悠久の男性陣に中身をバッチリ見られた。

無論、サラと二人で記憶がなくなるまでのOSHIOKIを決定した。

第15話 一国二城の主へ(3) (後書き)

誤字・脱字・指摘・感想お待ちしております。

第16話 錬金術師としての腕(1) (前書き)

ギリギリで完成

第16話 錬金術師としての腕(1)

ハジメマシテ。オヒサシブリデス、ビリノアデス。

……普通の口調に戻ります。

今現在、僕がどこにいるかと言うと……

「ほれ、さっさと作ってみろ」

とある錬金工房で、人を馬鹿にしたような笑い顔の人たちに囲まれ、錬金炉の前に立っているところだ。

どうしてこうなったのかは、数時間前にさかのぼる。

無事に契約を終えた僕は、その足で改装業者の所に向かった。そこでの話は割愛するが、改装に関してはふたつ返事だった。

なんでも、久々の大型改装依頼だったらしく、必要以上に張り切っていた。最高の仕事をしてやるぜ、と良い笑顔で歯を光らせる親方(46歳・既婚・孫あり)に、少し引いてしまったが、正式に契約を交わした。

後日、詳細は詰めるということにして、次に向かったのは道具屋、鍛冶や錬金の道具を専門に扱っているところだ。

「鍛冶用と錬金用の炉を一つずつ？ 嬢ちゃん本気か？」

「もちろん」

実は、このやりとり3回目である。すなわち、この店の前で3軒目と言うことだ。

商工ギルドに紹介された何軒かのうち、大きめの所3軒をピックアップしたのだが、前の2店舗は、このやりとりの後、商売の邪魔になるから子供は帰れと、けんもほろろに追い出された。

さてこの店はどうかだろう。

「誰かに頼まれたのか？」

「いえ、自分で使う物ですが。こう見えても、鍛冶師兼錬金術師ですから」

僕の言葉に、店主が目をむく。

「……ほんとか？ 嬢ちゃん」

「ほんとです」

そう言った僕の目をじつと見る店主。

「ふん、嘘はついていないようだな」

そう言って、何枚かの紙を取り出す。

「さてと、炉が欲しいんだっただな。いくつかタイプがあるが、どれだ？」

どうやら、客として扱ってくれるらしい。よし、ここで買おう。

「両方とも設置式の炉を、大きさは……まだ、部屋が出来てないから……」

改装の打ち合わせの時に来てくれるように頼み、その時にいろいろ話し合っただけに決めることにした。

「この街の、鍛冶師と錬金術師の顔役って誰ですか」

話がまとまった後、ふと思い出し店主に聞いてみた。

本来ならば、商工ギルドで聞くべきだったのだが、すっかり忘れていた。それならば、そういうことに詳しくそうな、道具屋の店主に聞くかと思ひ、聞いてみた。

「顔役？ 鍛冶師では、エルグだな。ドワーフ族の面倒見のいい男だ。領主お抱えの奴もいるが、そいつの師匠だから、エルグの方が顔役と言っているだろう。錬金術師では、スパルクだな。領主お抱えでもあるし、古くから王国に仕えてきた錬金術師の一族だからな」
鍛冶屋はともかく、錬金術師の方は少しまずいな。

お抱えだとか、錬金一族だとかいうやつは、非常にプライドが高い奴が多い。ましてやその両方だ。非常に、プライドが高いと予想される。

「あいさつ回りか？ 行つていた方がいいぞ。エルグはともかく、スパルクは嫌がらせをしてくるぞ」

権力を持たせると、まずいタイプの奴だからな、と続ける店主の

言葉を聞き、元々低かった行く気が、さらに低くなった。

しかし、行かないわけにはいかなかった。権力を持つ愚か者は、なにをやってくるか分からんな、一応挨拶はして、後は係わらないそれが一番だろう。

「悪趣味だな……」

領主の館に近い高級住宅街の一等地に、その建物はあった。

周りの落ち着いた景観をぶち壊すような、派手な建物。本当に、錬金術師の工房なのだろうかと疑いたくなる外観だ。

さつき訪れた鍛冶師エルグの工房の、本当に腕の立つ職人の工房と言うオーラに満ちあふれた場所とはあまりに違う様子に、ここの住民の技術レベルが低いと判断してしまいそうだ。

「実際、低いのもしれんな……」

道具屋の店主や、エルグの工房にいた人たちの噂話から推測するとそうなる。

曰く、基本調合の腕はそこそこ。オリジナルレシピを沢山持っていると主張しているが、そのほとんどが他の錬金術師から取り上げたものである。錬金一族である、ラカトリアー又家の本家の三男坊で甘やかされて育ち、金と権力のある家だったため、その二つを使うことに何らためらいはない等々。

話半分に聞いたとしても、かなり評価は低い。

錬金術師の腕前よりも、政治力で今の地位についたといった感じを、ひしひしと受ける。

だが、皆口をそろえて言うことは『あいさつに行かなければ、何らかの嫌がらせを行ってくる』だそうだ。

「一応手土産も用意したし、覚悟を決めて行くとするかな」

声に出して決心を確認し、門の所まで歩いて行った。

「ほう、貴女のようなお嬢さんが錬金術師ねえ」

テーブルをはさんで、向かい合って座っている男がそう言う。

青年と言える年ごろなのが、少々低めの身長と肥った体つきの為、もう中年に達したように見える。

この男こそが、この悪趣味な館兼工房の主人であるスパルクその人である。

値踏みするような視線の中に、何となく嫌な視線が混じっている。居心地の悪いことこの上ない。

「で、錬金工房を開くというわけだな」

「はい。まだ、先の話ですが、ご挨拶だけでもと思いまして……」
そう言いつつ、ポーチの中からさりげなくソフトボール大の石を出し、テーブルの上に置いた。

「んっ！ こ、これは！」

評判が悪くても一応錬金術師。これのことが一発で分かったようだ。

「お判りですか、『神鉄鉱石』です」

レムリア

この世界で一番の金属はと訊かれると、全員が口をそろえて言うのが、『神鉄』である。

この金属は硬く加工は難しいが、武器や防具に加工すればずばらしいものになる。神鉄製の武器を防げるのは神鉄製の防具のみと言われているのである。

神鉄を手に入れる方法はふたつあるが、確率が高いと言われるのが神鉄鉱石から精製する方法であると言われている。

神鉄鉱石は、ごく稀に鉱山から発見される。鉱脈といった物はなく、鉄鉱石の中に交じっていたと思えば、晶石の中に在るなど、発見される場所はさまざまである。また、発見されたとしても、その量はごくわずかである。その為、神鉄はもちろん、神鉄鉱石もかなりの高値で取引されている。

「こちらを差し上げます」

「な、何だと……！」

この大きさなら、そのまま売っても一生遊んで暮らせる程の額になるだろう。それをただでやろうというのだ。悪い話ではあるまい。

「それでは、これで……」

「待ちたまえ」

退出しようとする、呼び止められる。

「何か？」

「これをどこで手に入れた」

やはり気になるか。

本来少量しか取れない神鉄鉱石が、この大きさだからな。

「師匠から譲り受けたものです。どこで取れた物かは、知りません」
ほんとのことは言えないので、適当に嘘をつく。

「ふん、まあ良い。お前、錬金術師のはずだな。なぜ、自分で精錬しない」

「必要ないからです」

そう、僕は、もう一つのやり方が出来るから、鉱石の精製をしなくても神鉄を手に入れることが出来るのだ。

その『必要ない』を、スパルクは別の意味でとらえたようだ。
「自分で扱えないというものは必要ないということか、錬金術師の腕の程度が知れるということだな」

あ、ちよつと、カチンときた。

確かに、チートで貰った能力だが、ゲームで手に入れるのには、だいぶ頭を使って考え抜いて手に入れたものだ。馬鹿にされて少し頭に来た。

「出来ないのじゃなく、やらなくてもいいという意味で、必要ないです。少なくとも出来ない貴方より腕は良いです」

「な、なにを言う！」

妙にあわてて否定してくるスパルクの様子を見て、あの噂は本当だったようだと思った。

曰く、調合や精製は基本しか出来ない、と。

その後、売り言葉に買い言葉になり、冒頭の状況に追い込まれるのである。

自業自得と言えるかもしれない。

第16話 錬金術師としての腕(1)(後書き)

誤字、脱字、指摘、感想お待ちしております。

第17話 錬金術師としての腕(2) (前書き)

ギリギリ完成

第17話 錬金術師としての腕(2)

「ふう」

もはや、ため息しか出ない状況だ。

「偶には、違う人の作業を見るのも良いだろう。勉強させてもらいなさい」

スパルクが、にやにやと笑いながらそう言う。

魂胆が透けて見える。

今回、精錬するのは神鉄鉱石。僕があいさつの手土産として持ってきたものだ。

すなわち、成功すれば労せず神鉄が手に入り、失敗しても自分に損はなく、相手に恥をかかせ弱みを握ることが出来る、と言うわけだ。

「何か質問があったら、彼女にどんどんしなさい」

止めてほしい。

集中を乱すような行為を平然とするように言うなんて、こいつほんとに錬金術師か？

しかたない。

「今回行うのは、神鉄鉱石の精錬です。どういう作業をするか、解っていますね？」

教えるつもりで話し始めると、馬鹿にしたような返事が返ってくる。

「簡単だろ、融かして不純物を取り除いて、固めれば完成だ」

「……半分正解」

スパルクを含め、全員がうなずいているのを見て、思わずため息が出そうになる。

鉄や銅などの他の金属ならともかく、神鉄の精錬だぞ。出来ないこともないが、無駄が多すぎる。

「どういうことだ？」

「神鉄には、変な特性があります。硬く、高温にも低温にも耐えられますが、融かした場合融けると同時に気化していくというものがあります」

その為、普通の金属と同じようにやると、出来る量が鉱石の量の三分の一以下になってしまふのだ。下手すると、消滅してしまふということになりかねない。

まあ、見極めは簡単に出来るから、こちらの方法を取る人は結構いる。まあ、ほとんどが駆け出しの人たちだが……

「そこで、もう一つの特性を生かした精錬法を使います」

こちらに変な特性だ。ある一定の熱で、ある一定時間熱した後叩くと、不純物が表面に出てくる。それを再び熱すると表面に在る不純物がはがれる。この行為を何度か繰り返すことで、純度が100パーセントに近い神鉄が出来る。

「石の大きさ、重さ、外の気温や湿度によって、温度や時間、たたく回数、何度繰り返すかと言うのが変わってくるので、かなり熟練の技が必要になってきます」

これが、神鉄の扱いにくさだ。

「……」

他の金属と同じようにすればいいとも思っていたのだろう、スパルクは絶句しているようだ。

「この作業には、細心の注意が必要です。何か質問がある方は、今のうちか全て終わった後にしてください」

ざわざわしているが、質問はなさそうなので作業に入ろう。

正直驚いていた。

俺よりも年下、しかも女の子が錬金術師であるということと、ここにいる全員より腕が良いということに……

俺の名前は、ネマコル・ブリジット。名前から解るように、ここを治める領主の三男だ。

錬金術師になるために、去年まで王都にある学校に通っていた。

卒業し、個人で錬金工房を開くため、経験を積むために何処かに弟子入りしようとしていた所、親父から連絡がありここに放り込まれた。後から聞いた話によると、話を聞いたスパルクが実家の権力を背景にゴリ押ししたんだそう。自分がこの県で一番だと宣伝したかった、といったところだろう。

ほとんど学ぶことのない一年間を過ごした。スパルクの言う自分の弟子は、十数人いるが、俺のほかにもともなのは僅か三人で、ほとんどの錬金依頼をこの四人で回していた。

その間自称師匠であるスパルクと自称兄弟子の他の弟子たちはどうしていたのか？

答えは簡単、なにもしていない。

ただ、貴族の集まるパーティーに出席したり、取り巻きと化している自称兄弟子たちを引き連れて、他の錬金工房の邪魔をしに行ったりしているだけである。

そんな生活に嫌気がさし、まともな人たちと辞めようと話し合っているときに、自称師匠であるスパルクから呼び出しがあった。

集まった先にいたのは、小さな女の子。しかも、神鉄鉱石の精錬をやるという。

「ネマコル、お前出来るか？」

隣にいたまともな先輩が訊いてくる。

「あの大きさならなんとか」

見たことのない大きさの、あの鉱石なら駆け出しである俺でも、なんとかいけるだろう。見たところ新人であるあの子でも、やり方を知っていればかろうじて出来るだろう。

「うん、同感だ。あの子のお手並み拝見と行こうか。いざとなったら手を貸してやることしよう」

この考えが、傲慢だということはすぐに知らされた。

以前学校で、一回だけ聞いたことのある神鉄の精錬法を、少女がすらすらと説明する。

その後の作業も圧巻だった。

ガンガンと力強い槌の音。しかもそのリズムは一定で寸分の狂いもない。炉に鉍石を出し入れするタイミングも時間も寸分の狂いもない。まさに教科書通りの、完璧な精錬といったものだろう。

「あれは、失敗する気がしないな」

「同感だ、あそこまで正確無比なのは見たことない」

周りの先輩たちが騒いでいる。

普段、まじめに錬金しているからすごさが分かる。

では、普段まじめにやっていない自称師匠と兄弟子たちは言う
と――

「叩く回数は、確認したか？」

「はい、ばっちりです」

「炉に入れていた時間は？」

「計測済みです」

「後は、何回出し入れするかだな」

そのまままねる気満々だな。

確かに、錬金の技術の習得は模倣から始まるのだが……

「そのまままねても、意味ないだろうに」

初めに少女が言ったことだ。

周りの環境によって変わると……

最後にもう一度炉内に入れて熱してから冷やせば、表面に浮いてきた不純物が取れ完成だな。そう判断し、鉍石を炉内に入れ一息つく。

神経を使うところは過ぎ、後は温度管理と時間だけをはかっておけばいい。

「……」

改めて、周りを見渡す。

どうやら、精錬に対しての反応は、二通りに分かれたようだ。

スパルクをはじめとする多数は、にやにやとした笑いを浮かべている。時間を計ったりしていたようだから、作業手順をまねようと

いったところだろう。まあ、良いけどね。精錬法は基本なので、普通に本に載っているし。

そして、ごく少数が驚嘆の表情で見ている。彼らが、比較的ましな人たちと言うことかな？

そうこう考えているうちに時間が来たので、炉内から神鉄を取り出す。

うん、良い出来だ。純度98、86パーセント、ランクAだ。どこに出してもおかしくない、いや、高級品と言える物が出来た。

「さてと、そろそろ質問を受け付けますよ」

ない方がいいな、早く帰りたい。

「それは、どれくらいのもので、どれ位の価値だ」

スパルクが質問してきた。

作業についてじゃなく、価値について聞くとは、ほんとに錬金術師かと思う。

「僕が言ったところで、信じないでしょう。これは、差し上げたものです。そちらで鑑定したらいいでしょう」

「ふん、ならそうさせてもらおう」

偉そうに言っているが、笑っているのは隠し切れていない。

神鉄は、低級品でも金貨10は下らないから、当然だろう。

ましてや、今回のものは最高級品に近いものだと自負できる。その価値は、推して知るべし。

そんな物をただで手に入れたのだ。笑いが止まらないのだろう。

「他に質問は」

「ない、帰っていいぞ」

数人が、何か聞きたそうにしていたが、スパルクは無視して帰れと言ってきた。

まあ良いけどね。

「それじゃあ、失礼します」

後片づけを押しつけて、その場を後にする。

帰り際、質問したそうにしていた人たちのそばを通り過ぎる時、

その人たちだけに伝言を残した。

『質問があるなら、尋ねてきな』

今泊まっている宿の名前を添えておいたので、熱意があるなら尋ねてくるだろう。

第17話 錬金術師としての腕(2) (後書き)

誤字、脱字、指摘、感想お待ちしております。

第18話 錬金術師としての腕(3) (前書き)

暑いと集中力が落ちます。

第18話 錬金術師としての腕(3)

反応があったのは、次の日だった。

「バクスターさん、お客さんですよ」

少し遅めの朝食を取っているときに、宿の女将さんが僕に来客を告げる。

後ろを振り向くと、昨日連絡先を渡した男性と、その周りにいた三人であつた。

「ん？ 反応早いですね」

早くても、二三日後だと思っていたが……

「ああ、スパルクの奴は、王都に行ったからな」

神鉄でも売りに行ったのか？ そう思ったが、その予想は外れていた。

「あの神鉄を使って、本家の方に戻ると言っていたな」

「は？」

どうやら、スパルクがここに来たのは、実戦経験を積む為だったらしい。

腕は悪くないが、実戦経験のない三男坊のことを心配したラカトリアー又家当主が、実戦の場としてここ、県都ブリジットを選んだということだ。

「そして、王都に戻るための条件として、五年間お抱えをするか、ある一定以上の品質の物を作るという物が出されていたらしい」

「……あいつはバカか？」

思わずそう言ってしまう。

他人が作ったもので王都に帰っても意味がないだろ。

しかも、自分が作れない品質の物を持っていても、自分の首を絞めるだけだというのに、それを解っていないのだろうか。

「だと思ふ。俺達の他の弟子たちを引き連れて、屋敷等を処分してさっさと出て行ってしまったからな」

想像以上の頭の悪さ加減に、呆れてものが言えん。

「まあ、馬鹿のことはほつといて、なにをしにここに？」

そんなことがあったのなら、悠長に質問をしに来る暇などないだろう。

「職を失った状態だろ？」

「その辺は、問題ない」

そう言つて進み出てきたのは、四人の中で一番年が若そうな男だ。「親父に紹介状を書いてもらった。これさえあれば、どこにでも就職可能だ」

何それ？

「ん？ ああそうか、知らないのか。こいつの名前は、ネマコル・ブリジット。ここの領主の三男坊だ」

四人の中のリーダーなのだろう、一番年嵩な男―バルスと名のつた―が、ネマコルの肩に手を置きながらそう言つた。

おお、権力者の特権と言うやつか？

「本来なら使いたくなかつたんだが……まあ今回の場合はしょうがないだろう」

あまりいい顔をしていないところから、実家の力を使うことにあまりいい印象を抱いていないようだ。

「スパルクを見ているとな……」

「うん、激しく同意しよう」

実家の力を、自分の力と誤っているやつの元にいたんだ、その辺は嫌でもわかるのだろう。

「話がずれたな。で、僕に質問に来たということが良い？」

そう切り出すと、四人が肯定の意を示したので、亭主に許可を取りテーブルを一脚借りきつた。

「なにが訊きたい？」

まあ、大体わかつているけどね。

「まずは、どこでその鍊金の腕を手に入れたかだな」
代表して、バルスが質問をしてくる。

予想通りの質問が来た。

「ドワーフの師匠の所だな。四歳のころから出入りしていたから、十年になるかな」

「へー、師匠の名前は？」

「言わない。言うなと厳命されてるから」

経歴は嘘だが、こういうことはよくあるらしい。

ドワーフは地の民であり、工夫、鍛冶師がほとんどである。金属の精錬はやるが、化合などを行わない。理由として、地の恵みである鉱石に人為的に変質させるのは好ましくないという考えがあるからだという。

加工を主とする錬金術を認めてはおり、その力を使うことを嫌っているわけではない。

現に、ドワーフの錬金術師は何人も存在するし、加工された金属でドワーフが武器を作るといったことも頻繁に行われている。

金属の性質を知り尽くしているドワーフは、良い錬金術師になれるが、そのほとんどがドワーフ集落を出て活動している。しかも大半が名を残すことを、不名誉と思っている節があり、めったに世に出てこない。

技術を残すために弟子をとることもあるが、自分の名前を出さないように言い含めることがほとんどだという。

「へー……って、お前十四歳なのか！」

眼鏡をかけた、インテリ風の男―名前はカイル―が驚いたように訊いてくる。

「……何歳だと思っていたんだ？」

「神人は、若く見えると聞いていたので、三十に近いくらいかと……」

とりあえずムカついたので、カイルを殴っておく。

「他に聞きたいことは？」

軽くたたいただけに見えたのに、ピクリとも動かないカイルを見つめる三人に話を振る。

「う、えつと、はい。あの、先日に見た神鉄の精製についてなんですけど」

特に特徴のない、モブキャラを体現したような男―ジャクス―が質問してきた。こう見えても、4人の中では一番の腕だという。

「なんというか、精錬し始めた時、ちよつと違和感があったんですが、何ですか？」

「ん、気付いたのか」

精錬を始めた時、多少戸惑ったことに気付いていたらしい。あくまで多少で、精錬に影響はほとんどなかったのだが、それに気付くとはなかなかやるな。モブのくせに。

「何か、失礼なことを考えてませんか？」

「いや、その違和感の理由は簡単だ。使い慣れた道具じゃなかったから、少し戸惑っただけだ」

急にやることになったので道具を借りたのだが、酷いものだった。スパルクが使っているという物を借りたのだが、こちらに来てからあつらえたと言う道具は、あまり使った形跡はなく新品同様だった。その為か、整備がほとんどされておらず、高価な良いものだが使いづらいことこの上なかった。

あれが手になじむものだったら、最高品質の物が作れただろう。

「やっぱり違うものですか？」

「ああ、違う。『名人は道具を選ばない』と言うが、それは間違っているな」

その道を極めた人ほど、道具にこだわる傾向にある。

「使い慣れた物と使い慣れない物、作業効率から言って、どちらが上かは素人でもわかることだ」

いまだ動かないカイルを除く全員が、理解した表情になる。経験があるからだろう。

「他には？」

「次は……」

その後は、錬金術に関する質問をしてきた。

出来るだけ答えたが、答えられない物もあった。

オリジナルレシピをさらす、馬鹿がどこにいる。

訊いてきた馬鹿^{カイル}には拳をくれてやった。

「次、馬鹿な事を訊いてきたら、そぎ落とすからな」

「……イエス、ママ」……

四人が声をそろえて答える。

言ってみて何だが、本当にこのセリフって効果があるんだな……

まあ、解らないでもないが。

昼食をはさんで長々と話していたが、太陽が傾き始めた。あまり長い間、テーブルを占拠していたため、おかみさんの目が怖くなってきた。

「そろそろいい時間だから、終わりにしたいのだが……」

そう切り出すと、四人は周りを見回し、時間を確認する。

「そうだな、そろそろ終わりにしよう」

バルスとカイルとジャクスは立ち上がったが、ネマコルは座ったままだった。

「? どうした?」

「言うか、言うまいか迷ったけど、言うことにする。親父からの伝言だ『お抱えの錬金術師にならないか』だそうだ」

なんと?

「『年は若いらしいが、神鉄を精錬できるのなら、腕は前任者^{スバルク}以上だろう。歓迎するぞ』だそうだ」

良い話なんだろう、他の三人の驚きの中にある、うらやましそうな表情からも分かる。

ふむ、やはりここは……

「良い話だと思う、だが、断る」

いろんな用意を、もうしちゃっているしね。

「この街で、工房を開く予定だ。したがって、受けるわけにはいかない。依頼を優先的に受けるから、お抱えの話はなかったことにし

てほしいと伝えてくれるかな」

僕がそう言っていると、ネマコルは「わかった」と短く呟き、驚愕の表情を浮かべている三人を引き連れて帰って行った。

お抱えなんて忙しそうなポジションはごめんだ。

ゆっくり、まったり過ごしていくのが理想なのだから。

第18話 錬金術師としての腕(3) (後書き)

誤字、脱字、指摘、感想お待ちしております。

第19話 鍛冶師としての腕（1）（前書き）

やはり、ギリギリ投稿。

第19話 鍛冶師としての腕(1)

買い取った工房兼家(予定)の改装が始まってから少したったある日、僕は鍛冶師の顔役であるエルグに呼び出され工房に向かっていた。

改装が終わるまでは暇であるため、何度か手伝いに行っていたが、呼び出し、しかも緊急の、と言うのは初めてだ。

「何か問題でも起こったか？ でも、何人もの優秀な弟子たちがいるから、たいていの問題は、解決できるはず……」

それなのに僕を呼んだということは、何か不測の事態が起こったと考えた方がいいかもしれんな。

そうこうしている間に、エルグの工房の前まで来た。

そして、いつものように裏に回り、裏口から工房内に入る。

「おう、来たか、ビリノア」

工房内には、主のエルグと見知らぬ老人がいた。

「お客さんですか？ それと他の人は？」

広い工房内には、エルグと客(?)しかおらず、閑散としていた。

「うむ、別件でな。全員出払っている」

よく見れば、エルグ自身も出かける用意をしていた。

「エルグよ、本当にこの者に頼むのか？」

「ああ、俺の知っている中で一番の腕の持ち主だ」

……厄介事のおいがしてきた。

「今日、呼び出したのは他でもない。こいつの依頼を受けてもらいたいと思っ」

そう言っ、隣にいた老人を指さす。

「エルグよ、人を指差すのは、あまりよくないぞ」

そう注意したのは隣に立っていた老人―というものの、背はしっかりと伸びているし、白髪であるものの髪の毛はきちりとなでつけられており、着ている物も高級品である。

「初めまして、わしが今回の依頼人、ガルバ・ライナムだ」

「初めまして、ビリノア・バクスターと言います」

とりあえず自己紹介から入る。

「それで、依頼とは？」

「うむ、わしの孫がこのたび騎士団に入ることになってな……」

ガルバさんは、元貴族だそうだ。自分の息子が一人前になったため、家督をあつさりと譲り妻とともに、ここに移り住んできたということだ。

その、家督を譲った息子には三人の子どもがおり、その一番下の子が騎士団に入ることが決定したのだという。

「王都にいたころ、剣の手ほどきをしてな、こちらに来てからもちよくちよく来てくれたのだよ」

そんなかわいい孫の為に、自分の知る限り最高の鍛冶師に最高の武器を作ってもらおうと依頼してきたのだという。

「俺が引き受けてやれりやあ良かったんだが……」

ドワーフ一族の集まりがあり、一ヶ月は戻ってこられないのとのことだ。

「でだ、俺の知る限り、最も腕の良い奴を紹介しようと思ってな」

「それが僕ですか……」

豪快に笑いながら、肩を叩いてくるエルグ。かなり痛いのでやめて欲しい。

「エルグ、本当にこの子どもが、お前に匹敵する腕を持っているのか？」

「おう、保障する」

「お前が保証するなら、信じないでもないが……」

それでも、まだ疑いの目を向けてくるガルバさん。

まあ、慣れたけどね。

「信用してくれて結構だ。で、頼まれてくれるか？」

「良いですよ。だいぶお世話になってますし」

「おう、そうか。材料は好きなのを使え。炉はいつもの所のものを

使ったらいい」

それじゃあ急ぐからと、エルグは出て行ってしまった。

残されたのは、僕と依頼人のガルバさんだけ。……鍵とかどうするんだ？

鍵の問題は解決した。あの後すぐに、弟子の一人が帰ってきたため、その人へ後は頼んだ。

そして現在、迷風亭の食堂にて詳しい話を聞いているところです。「では、改めて依頼の確認をします。依頼人はガルバさん。依頼内容は、騎士団に入団するお孫さんの武器の製作、でよろしいですね」

「ああ」

「武器と言うと、なにを製作しますか？」

騎士の持つ武器は、そう多くない。

馬上で使うランスと呼ばれる騎士槍、馬上でも、馬から降りた時でも使える長剣（その人によって種類は異なる）、牽制目的の投げナイフ、止め、自決用のナイフくらいか。

「長剣だ」

「解りました。後は、後日と言うことで、連絡先を教えてください。僕はここに泊ってますから」

「うむ、了解した」

話が早くてよかった。

前にも言ったかもしれないが、店に在る武器は規格が決まっており、どこで手に入れても大体同じようなものだ。

対して、オーダーの武器は、その人に合わせて微調整をしながら作るものなのだ。

今回の場合、依頼人が使うものではないため、具体的な話まで持っていけないのだ。

「二、三日後に来るという連絡があったから、その時に詳しい話をするでしょう」

「分かりました。見本の剣を用意しておきます」

今日はここまでと言うことで、ガルバさんは帰って行った。
久しぶりの単独依頼、思いつきり楽しむかな。

二日後、ガルバさんから連絡があり、家の方まで来てほしいと言われたので、見本の剣を持って高級住宅街を歩き中。

場所を聞いて驚いたのだが、あのスパルクの悪趣味屋敷の真向かいだというのだ。分かりやすくて良いが、世の中は狭いと感じてしまった。

「たのもー」

周り比べると幾分か小さめだが、品の良い家の門前で声をかける。

少し待っていると、鍵の開く音が聞こえ、戸の隙間から品の良さげなおばあさんが顔を出す。

「どなたですか」

「先日、依頼を受けた鍛冶師です」

「ああ、貴女が」

おばあさんの顔が、笑顔に彩られる。

「主人から話は聞いていますよ。どうぞ」

そう言って、門の鍵を開けてくれる。

いや、僕だからいいけど、もう少し警戒を持ってほしいと少し思ってしまったよ。

客間に通され、少し待っていると、ガルバさんとおばあさんがお茶を持って入ってきた。

「良く来てくれたな」

「いえ、仕事ですから。それで、お孫さんは？」

「支度到手間取っているようだな。茶でも飲んで待っていてくれんか」
目の前に出されたお茶を一口飲む。うん、高級茶だ。

お茶を出してくれたおばあさんは、そのままガルバさんの隣に腰を下ろしている。先ほど、ガルバさんのことを『主人』と言っていることから、奥さんなのだろう。

「それにしても、奥さんが自ら客の対応とは……」

「そのことか。わしも使用人を雇おうかと言ったのじゃが……」

「うふふふ。自分で出来ることは自分でやりたいのよ」

「と言って、訊かんのじゃ」

上品な外見に、芯のしっかりした性格ですか。なかなか優良物件だったようすな。

「そうじゃろ。わしの人生の中で、一番の大物じゃよ」

「もう」

赤くなつて、ガルバさんのわき腹をつねる奥さん。

……砂はいてもいいですか？

「でも、奥さん自らの客対応はまずいと思いますけど……」

危害を加えようとしているやつがいたら、まずいとは思わないのか？

「大丈夫よ」

？

「うむ、大丈夫だな。我妻アリアは、元々冒険者だったのだよ
なんと？」

「銀線のアリアと呼ばれていて、当時その美貌と強さから周りから
一目置かれていたのだよ」

「あなたと出会ったころね。懐かしいわ」

「そうだな、始めは敵だったのだが……」

「剣を打ち合わせた時、はつきりと運命を感じたわ」

「うむ、わしもだ」

……もう砂糖はいいいですか？

と言うか帰りたいです。

いまだ新婚気分の二人のいちやつきを見せつけられるのは、拷問に等しいです。

HPが、がんがん削られる空間に耐え切れなくなりそうになった時、ドアの開く音がして誰かが入ってくる。

「おお、来たか」

ちょうど、ドアに背を向けるように座っていたため姿は見えないが、ガルバさんの対応から、お孫さんだということは分かった。

挨拶をしようと立ち上がって振り向き、その姿を見て、僕は正直驚いた。

「貴女が、私の剣を作ってくれる鍛冶師さんね。初めまして、クリステイーナ・ラインダムと申します」

騎士服を着た、すらりと背の高い女性がそこにいた。

第19話 鍛冶師としての腕（1）（後書き）

誤字、脱字、指摘、感想お待ちしております。

第20話 鍛冶師としての腕（2）（前書き）

今回は主人公でなく、別の人の視点から書いてみました。

第20話 鍛冶師としての腕(2)

白銀騎士団へ入団が決まった時、私は思わず小躍りしながら部屋の中をぐるぐる回ってしまった物である。

祖父母と一緒に暮らしていた時、寝物語として何度も騎士であるおじいさまと冒険者であったおばあさま、二人の馴れ初めなどの話を聞くうちに、いつしか私も二人のような出会いがしたいと思うようになっていった。

それにはどうすれば良いのか？

おばあさまみたいに冒険者になればいいのか？

実を言うとそれは無理なのだ。曲がりなりにもラインダム家は男爵家。その娘である自分が冒険者をやることは、問題がありすぎる。それならもう一つの方、おじいさまのように騎士になればいい。そう思つて、おじいさまに教えを乞うたのです。

始めは不純な動機でしたが、剣を習ったり、馬術を習ったりするのは案外楽しく、当初の目的を忘れて真剣に騎士を目指すようになっていった。

まじめに騎士を目指すこと数年、おじいさまからのお墨付きをもらい、騎士団の入団試験を受けて、見事一発で騎士団入りを果たしたのです。

白銀（女性騎士のみで構成された騎士団。主な任務は、王妃、王太子妃、王女の護衛）より、黒曜（男女身分関係なく、実力で選ばれたエリート部隊。おじいさまもここに在籍していた）が良かったなと思つていると、おじいさまから連絡があつた。

入団祝いに、剣をプレゼントしてくれるというのだ。

鍛冶師に頼むため、こちらに来られないかとのことなので、すぐに行く伝えた。久しぶりに剣の修業を着けてもらおうかな。

鍛冶師との打ち合わせの日、――前の日に届いたばかりの騎士服を

着て鏡の前でポーズをとって遅れたのは、ここだけの話―応接室のドアの前に立つと、中から声が聞こえてきた。

『まあ、あなただったら』

『ふっ、お前こそ』

うあ、始まつてる。

祖父母は、鮮烈な出会いをして、お互いの恋心が燃え上がったのだ。本来そう言うものは、冷めやすいと言われているのだが、あの二人は、今でも熱烈に愛し合っており、人がいようがいまいが関係なくいちゃいちゃするのだ。

祖父母を尊敬しているが、そこだけはどうしても好きになれない。

「はあ」

躊躇してもしようがない、ため息をつきながらドアをノックして開ける。

「おお、来たか」

おじいさまの声とともに、こちらに背を向けて座っていた人が、立ってこちらを向いた。

第一印象は、小さい女の子だった。

私の背は高い方だが、その子の身長は、私の胸くらいまでしかない。

鍛冶師の方がこられたと聞いていて、なおかつ応接室で、祖父母が対応しているということは、この子が鍛冶師なのだろう。

鍛冶師とは、がつちりした男の人と想像していたので、だいぶ違ったがとりあえず挨拶をしなければ。

「貴女が、私の剣を作ってくれる鍛冶師さんね。初めまして、クリスティーナ・ラインダムと申します」

「……初めまして、ビリノア・バクスターです」

まじまじとこちらの顔を見ながら、挨拶を返してくる。

何か顔についているのか？

「すみません。騎士団に入団したということと、お孫さんと言うことだけしか聞いていなかったので、てっきり男の方かと……」

ああ、私と同じ勘違いをしていたというわけだ。

「ふむ、ならお互い様だな。私も鍛冶師と聞いたただだったから、男の人を想像していたぞ」

「お互い様ですか」

「ああ」

顔を見合わせ、二人で笑い合う。

「自己紹介は済んだか？ 本題に入りたいのだが」

おじいさまの言葉に、そうだったなと思いだし席に着く。

ビリノアちゃん（小さい子だし、何となくちゃん付けが似合っているからいいだろう）も、座っていた席に着いた。

「これが見本になります」

テーブルに、布に包まれたものが置かれる。

布を開けてみると、中に一本の剣があった。

「抜いてみてもいいか？」

「どうぞ、その為の見本ですから」

さやから抜いてみると、まだ新しいのか銀色に輝く刀身が出てきた。

「……」

とりあえず構えてみる。

「……普通だな」

良くもなく悪くもない、ごくごく普通の剣。それが構えた結果、私の出した結論だった。

「ふむ、まだ解らんか……」
「は？」

おじいさまが、よくわからないことを言う。

「そうね。クーちゃんは、まだそこまで至っていないってことかしら」

おばあさままで。

「貸しなさい」

おじいさまがそう言って、私の手から剣を取っていく。

「……良い剣だ。エルグが薦めるだけはある」
「そうね」

「おじいさま、おばあさま、どういことですか？」
普通の剣のはずなのだが……

「ああ、普通だ。基本に完全に沿った普通の剣だ」

「ええ、基本をしつかりと守って作られた普通の剣ね」
そう、基本にきっちり沿った……きっちり沿った？

「気付いたようね。鍛鉄製の剣で、ここまできっちり基本に沿えるなんて、もの凄いことなのよ」

「ノーマルな剣は、鍛冶師の腕を如実に表すからな」

ほんとに腕が良いんだ。こんなに小さいのに……

「なんか、不愉快なこと考えてません？」

「か、考えてないよ」

「……良いでしょう。今回決めるのは、剣の形状と材質です。何か要望はありますか？」

突っ込まれなくて良かった。

それにしても、剣の形状と材質か……

「どんなものでもいいのか？」

「出来る範囲であれば」

ふむ、それならば……

「形状は、見本通りで。材質は、神鉄で」

「分かった。それじゃあ、重心と剣の長さを……」

「……待て！」「……」

三人が同時にとめる。

ちよ、なんで、承知するの？

形状はともかく、材質については冗談のつもりだったのに。

「？ 値段はお安くするぞ」

「試しに聞くけど、いくら？」

「ほんの金貨150枚くらいだ」

最も安くてな、と続けるビリノアちゃん。

ほんのじゃない！ 高い！ もうプレゼントの値段じゃない！

「鉄か、二種合金で良いよ」

「ふむ、妥当な線だな」

おじいさまも、賛成してくれる。神鉄製の武器の値段を聞いたからであるう。

「妥当なところですね。じゃあ、今回は二種合金の黒赤鋼こくせきこうを使います」

「黒剣を作ってくれるの？ ほんとに？」

「はい。本当ですよ」

黒赤鋼から作られる黒剣は、折れず曲がらずと言われ、きちんと手入れすれば20年30年持つと言われているものである。

二種合金製の武器の中では高めのもので、新人からしたらあこがれの武器の一つである。

「お願いします」

思いつきり頭を下げる。

「分かりました。それでは、剣の大きさとかを決めましょうか」

その後、見本の剣を片手に庭に出て、剣の長さや重さ、そして重心の位置や、グリップの太さなど細々としたことを計り、紙に書き込んで（私には読めない文字があった）いった。

計測が終わった後、応接室に戻っておじいさまとの値段交渉に入ったのだが、実にあっけなく終わった。

「鉾石代込みで、銀貨25枚と言ったところです」

「相場より安いな」

「生産者から直接ですからね。あと、基本形なので、余計な加工代と言うのが発生しないといった理由もあります」

「納得できるな。手付金として、銀貨5枚払おう。残りは完成してからと言うことで良いかな」

「結構です。それでは、契約書にサインを」

レムリアさまの名のもとに誓う、神殿発行の契約書を出してきた。

「良かるう」

書類に不備はないか良く確認して、おじいさまとビリノアちゃんがサインをして、拇印を押す。

「契約成立です」

「どれくらいで出来るの？」

「一週間ぐらいでしょうか。出来れば工房の方に来てほしいのですが」

「なにが起ろうが必ず行く。だから——」

「ちゃんと作っておきますよ」

そう言って、手付金をもらったビリノアちゃんは帰って行った。

「おじいさま、ありがとうございます」

騎士団に入るまでにはまだ間があるので、剣の完成までおじいさまの所に泊っていくことにした。

「可愛い孫娘の為だ。どうってことないぞ」

「それでも、ありがとうございます」

おじいさまをマッサージしながら、お礼を言う。

一週間後、私の剣が出来る。

「本当に、楽しみだ」

第20話 鍛冶師としての腕(2) (後書き)

誤字、脱字、指摘、感想お待ちしております。

第21話 鍛冶師としての腕(3) (前書き)

遅くなりまして申しわけありません。

第21話 鍛冶師としての腕(3)

ラインダム家訪問からちょうど一週間が経過した。

連絡があり、ラインダム一家が午後エルグの工房にくると言うので、黒剣の微調整をしながら待つことにした。

「それにしても、おいしいな。本当にうちに来るつもりはないのか？」

「あははは、ごめんなさい。もう自分の工房を手に入れているから無理かな」

ここに来るたびに繰り返される会話。

ここにいる人たちは、良くも悪くも職人だ。自分より腕の良い者なら、その人の性別や年齢なんて関係ない。ただその腕前を尊敬し、その域に達しようとするだけである。

逆を言えば、客でもなく弟子入りに来たわけでもないただの一般人には非常に厳しいということである。

「おら、邪魔だ。どけ！」

「ちょ、なに」

「そんな所に突っ立ってんじゃねえ」

「なに……って、真っ赤に焼けた鉄を突き付けんな」

「んじゃあ、そこからどけや、このアマ」

「ひ……。ごめんなさ……い」

職人たちの迫力に負けて隅っこの方に追いやられ、涙目で土下座している女性がいい例だろう。

「あゝ、サラ。とりあえず、こっちなら安全だから早く来たら」

僕がそう声をかけると、職人たちの隙間を素早く駆け抜けてくる。

「うっ、怖かったよ」

幼児帰りでも起こしたのか、大の大人が僕にすがりついてくる。

「あゝよしよし。もう怖くないからね」

と言つて、頭をなでる。

対応を子ども用に見てみると、しばらく気持ちよさそうになでられ

ていたが、すぐに我に返り、なでていた手をどけられた。

「はあ、来るんじゃないかったかも」

「来たといって言ったのは、そっちだろ。今更文句を言うな」

「こんな目に遭うとは、思わなかったのよ」

「始めに忠告したよな。『なにがあっても知らないぞ』と」

なぜサラがここにいるのか？

答えは簡単、伝説の冒険者銀線のアリアー依頼人ガルバさんの奥さん―に会いたいと言って無理についてきたのである。

三日前に仕事から戻ってきた悠久のメンバーと食事をしていた際、今回の依頼と依頼人の話しをしたのだ。

その話が出たとたん、サラがものすごい勢いで食いついてきたのだ。その勢いは、他のメンバーが引くくらい凄いものだった。

『アリアって名前で、元冒険者？ それってもしかして……やつぱりそうなんだ！ あの伝説の……え？ 話した？ な、なにを？

どんな内容の話をしたの！ 事細かに、微細に、隅々まで教えなさい。いや、教える！ 吐けー！』

仕舞いには、僕の胸ぐらをつかんでがたがた揺らす始末。

脳みそがいい感じにシェイクされ、意識が飛びそうになったところで、我に返った他のメンバーが引き離して助けてくれたのだ。

その後も、未練がましくブツブツ言っていた。その様子があまりにもうつとうしく、他のメンバーからも冒険者稼業に支障が出ると相談されたため、今度紹介すると言ったのだった。

「ふふふふ。会える♪ 会える♪ 伝説に会える♪」

先ほど、職人たちにボロボロにされたくせにもう復活している。

連絡があった朝の調子が戻ってきたようだ。正直うつとうしい。

微調整をしている黒剣を叩きつけてやりたい、という衝動を我慢しながら作業を続ける。

「ビリノア、客だぞ」

脳の血管が切れそうな時間を過ごしているところに、待ち望んでいた来客の知らせ。

「分かった。すぐ行く……お前は正気に戻れ」
「はっ」

すぐに返事をし、浮かれて歌いながら小躍りしているサラに軽く一撃を入れて正気に戻す。

刀身や握りの最終チェックをし、鞘に収め立ち上がる。

「ほら、行くぞ」

「あうあう」

正気に戻ったとたん、あこがれの人に会えるということ意識して緊張で固まるサラを無理矢理引きずって店舗スペースまで行く。店舗スペースは、簡単な作りになっている。商品引き渡しのカウンターと、商談用にテーブルとイスが何脚か置いてあるだけの部屋になっている。

そのテーブルの一つに、ラインダム一家が座って待っていた。

「お待たせして、すいません」

「……」

カウンターから出て、そちらに向かう。

サラはと言うと、僕の後ろに隠れるようについてきている。女性としては大柄な方のサラが、女の子としても小柄な僕の後ろに隠れている姿は、ちょっとシニールかもしれない。

「いや、そう待っていないよ。所でそちらの女性は……」

「僕がお世話になっている冒険者パーティー悠久のメンバーの一人です」

「さささサラです」

緊張のあまり、どもりまくりだな。

「そうか、ガルバ・ラインダムだ。隣にるのが妻のARIAと孫のクリスティーナだ」

「よろしく」

「うふふふ、よろしく」

「はははははい、よよよよろしくお願いします」

銀線のARIA

憧れの人に声を掛けられたのが相当うれしかったのだろう、更に

どもりが激しくなる。まあ、表情は恍惚としているのだが。

「……うふ」

その態度から何か感じ取ったのだろう、アリアさんが何かを思いついたように笑う。

「サラさん、少しお話ししましょうか」

「ははははははい、よよよ喜んで！」

優雅に歩くアリアさんと、右手と右足が一緒に出てるぎこちない歩き方をしているサラが、店舗の外に出て行った。

「おばあさまは、どうしたんだろう？」

「アリアは、ああ言うのが好きだからな」

「あそこまで解り易ければ、なおさらと言つやつですか？」

「そうだな」

「??」

クリスは解っていないのか、頭に疑問符を浮かべている。

要するに、アリアさんは、自分を純粹に慕ってくれる人が好きなのだろう。その上で、自分追い付こうとしている人なら、なおさら好きなのだろう。手助けしたくなるほどに、だ。

「裏庭で稽古、ってところですかね」

「落ち着かせた後にね」

「そう言うこと……」

納得がいったところで、商談に入らせてもらいましょう。

「確認します。今回のご注文は、クリスティーナ様のお使いになる長剣・片手剣タイプ。材質は黒赤鋼でよろしかったですね」

「ああ。間違いない」

「では」

テーブルの上に鞘に入った剣を置く。

「お確かめください」

その言葉とともに、クリスがそっと剣を手に取り、鞘から抜くと、まっすぐな黒い刀身が現れる。

「……凄い」

歪みのない漆黒の刀身、これを作るのはかなり難しい。

黒赤鋼は、黒石鋼と赤石鋼を化合したもののだが、完全に溶かす鑄造だと僅かに化合が弱くなり漆黒にならない。強度なども弱くなる。板にして、型抜きで作っても良いのだが、材料が無駄になる。錬金術師としては、そこは譲れないのです。

「品質を調べても？」

「どうぞ」

ガルバさんは、眼鏡のようなものを取り出して掛ける。鑑定を持つていない人が鑑定するときに使うマジックアイテムだ。

「……ランクA。確かにエルグが一番弟子より押すわけだ。この年でこれほどの物を作れるとは……」

「……」

感心するガルバさんと、刀身を見続けるクリス。

「そろそろいいですか」

いい加減話を進めたい。

「そうだったな。クリス、正気に戻れ」

そう言っただけでガルバさんは、クリスの頭を軽くたたき、正気に戻らせた。

「それで、クリスティーナさんとうですか？ 何処か不都合なところとかないでしょうか」

「ない」

そう言っただけで、クリスは店舗スペースの真ん中あたりで、軽く素振りをしていた。

「長さ、重さ、重心、全部が私の好みだ。もの凄く手になじむ。まるで長年使い続けたようだ」

嬉しそくに剣を振っていたが、ふと思い出したように外に出ていく。

多分だが、裏庭あたりで稽古しているアリアさんたちの所へ行ったのだろう。

「……まだ、あの剣は彼女のものではないはず……」

「……すまん。我慢できなくなったのだろう」

あそこまで言うのなら、細かい調整とかは要らないだろうから良いのだけど、もう少し常識をわきまえて欲しかったよ。

「そうだな、家に帰ったら、『スペシャル特訓ここは地獄の一丁目・世界常識編』にご招待してやらねばな」

笑うガルバさんが怖くて、二三步引いてしまったのは、ここだけの話だ。

第21話 鍛冶師としての腕(3) (後書き)

誤字、脱字、指摘、感想お待ちしております。

第22話 簡単(?)な依頼の行方(1)

「なんだこれ？」

冒険者ギルドの掲示板に張られた依頼書の一つを見て、思わず僕はそう呟いていた。

「どうした、ビリノア。何か気になるものでもあったか？」

「あ、アレス。これなんだけど……」

僕が指差した依頼書には、こう書かれていた。

『求む、魚の運搬。条件、魔術師二人以上』

事の発端は、冒険者規約に在る。

規約には、一定期間冒険者活動を行わなかった場合、冒険者資格をはく奪すると言った物がある。

冒険者生活と言うものにはあまり興味はないが、便利な冒険者カードは欲しい。

その為、工房を手に入れるための交渉がひと段落したので、依頼を受けようと悠久のメンバーとともに、ギルドに顔を出したのだ。

「魚の運搬依頼は、この時期になると時々出てくるものです」

掲示板の前では邪魔なので、テーブルに移って説明を求めると、代表してダイさんがしてくれる。他のメンバーは、掲示板の前でまだ依頼書を見ている。

「この辺りは海から遠く、馬を飛ばしても三日間はかかります」

なるほど、荷馬車となればさらに時間がかかるということか。寒い時期ならともかく、今のようには暖かい時期では、魚がダメになる可能性は多いな。

「基本この辺りで、魚と言うと干物、もしくは川魚なのだが、上流階級の人たち―特に王都から来た人たちは、それが我慢できないと言う人がいてね……」

「それで、こんな依頼が……」

「仕事の内容は、簡単だ。魚の入った箱に冷却魔法をかけるだけ」

確かに、氷系の人たちにとっては簡単だろう。冷却魔法は基本だし……ん？

「なぜ、二人以上？」

冷却魔法をかけるだけなら、一人で十分のはず。

「冷却魔法をかけるのは簡単です。しかし、持続力はあまり高くありません」

まあ、使っているのは木の箱だからだろう。

断熱材として使えそうなものに、スライムと言うのがある。これは主に衝撃吸収材として使われるものだ。断熱効果は高いのだが、食品搬送には使えない。なぜかという、スライムが中の食品を食べてしまうのだ。

「使えないな」

「ませんね」

スライムの評価をした後、更に説明が続く。

「昼夜問わず、ある一定時間枚に魔法をかけることは、かなりの負担になります。その為二人で時間を決めて魔法をかけることによって、負担を減らそうということなのですよ」

鮮度の高い魚の方が高く売れるため、多少金がかかって二人魔術師を雇うことにしているらしい。

「期間としては、往復で二週間。仕入れ等を合わせると、二週間半と言ったところですよ」

長いな。ここからあんまり離れるわけにもいかないから、今回は諦めるか。

「これって、魚を凍らせて持ってきちゃいかんのか？」

「凍らせる？ 魚を？」

受けないことは決めたけど、疑問に思ったことは聞いてみる。

「凍結魔法で、魚を凍らせて持つてくるといいますか？」

「そうだけど」

「それはちょっと難しいですね。凍結魔法は、対象が一人であつて、全体ではないのです。使うにしても、一匹二匹ならともかく何十匹となると手に負えません。さらに、効果時間が極端に短いため、すぐに解凍してしまいますよ」

一匹一匹凍らせるのは手間か。すぐ溶けるんじゃない意味がないし……

「水に凍結魔法をかけるとどうなる？」

「水に、ですか？ 普通に凍りますが……」

ならば……

「凍った水つて、すぐに水に戻りますか？」

「いや、氷のままだが」
いける。

「魚を水の中に入れて、凍りつかせて運んだらいけないのかな？」

「は？」

「魚を水ごと凍らせて運べないか？ と聞いたんだが」

僕の言葉に、ダイさんは一瞬呆けた表情を見せたが、すぐにまじめな顔になる。

「試す価値がありそうですね。氷の解ける時間とかの問題はありそうですが、上手くいけば一般家庭でも新鮮な魚が手に入る可能性が出てきますね」

本格的に話し合ってみましょうか、と言うダイさんに、話し合いには参加するけど、実際に現地に行くことは出来ないことを伝える。「そう言えば、工房の件がありましたっけ。解りました、実証とかはほかの人にも任せられることにしますよ」

依頼主に、興味があるなら連絡してくれるように頼んできますよと、ダイさんは依頼書を持ってカウンターへと向かって行った。

「ふむ、依頼主が乗り気なら、実証の前に実験をしないといけないな」

さて、どうするかと、考えを巡らせて……あ。

「仕事を受けにここに来たんだっけ」

魚談議に真剣になっちゃったが、本来の目的は冒険者として仕

事を受けに来たのだったことに気付く。

「簡単に出来る、雑務依頼でも受けるか」

さて、今回の依頼は、『庭のレイアウトを変えたい』と言うもので、依頼主は、商家のご隠居夫婦だ。仕事内容は、庭石の運搬―力仕事ってことだろう。

本来は、何人かで協力してやる依頼なのだが、今回は僕一人だ。男の人ならともかく、女の子のやる仕事じゃない。実際、受付のおねーさんは一瞬顔をしかめた後、考え直すように言ってきたしな。

「本当に大丈夫なのかい？」

「大丈夫です。魔術師なので、魔法を使えば何とかできます」

依頼人であるお爺さんが心配そうに言ってきたが、チートボディを持っている僕にとって問題はない。

「そうかい、じゃあ頼むとするかな」

さつそくと庭に案内されたのだが、その庭を見て僕は固まってしまった。

「この岩をどうにかしてほしかったのだが……」

庭のど真ん中に鎮座する岩を叩きながら、おじいさんが言う。

大の男の人が二抱えするぐらいの大きさの岩を見ながら、気になった事をお爺さんに尋ねる。

「この岩は、いつからある物ですか？」

「ん？ なんでも、この家を建てる前からあった物らしいぞ。結構な大きさだから、そのまま残しておいたらしいが……」

「……なんで記録が残ってないんだよ……」

おそらく、この岩は要石であろう。

微量ではあるが、魔力が感じられることから推測できる。

何かを封じるために置かれていると思うのだが、普通こういうところに在るはずの記録と言う物が残っていないのだろう。民家を平気で建てるということからも分かる。

「な、なんと！ そ、そんな危険な物が……」

「はい。記録がないので詳細は解りかねますが、微力ながら魔力を感じますので何かあると推測されます」

「う、む。ならば動かすのは得策ではないということか……」

「そうですね。対応策としては、このままにしておくというものがあります。ただし、それ相応の管理と言う物が必要となります。もう一つは、封じられている物を取り除くというものですが、どちらを選ぶにしても、これが何であるかを調べなければ先に進めません」
そうなると、自然にBクラス以上の依頼になるが、調べるだけなら僕がやっても問題なからう。

「う、うむ。どちらの方法を取るかは決められんが、調べることを引き受けてくれぬか？」

「解りました。引き受けましょう」

なんというか、簡単な依頼のはずが、大騒動に発展しそうな予感がビシビシする

第22話 簡単(?)な依頼の行方(1) (後書き)

誤字、脱字、指摘、感想お待ちしております。

第23話 簡単(?)な依頼の行方(2) (前書き)

迷走中

第23話 簡単(?)な依頼の行方(2)

正直なところ、面倒なことになった。

依頼人の所から、ギルドに向かう途中思ったことだ。

いや、要石の調査はそんなめんどくさくはない。いろいろと調べ物をしなければならぬところが少し手間だが、最終的に魔法を使えばどうにでもなる。

問題は、調査後だ。

要石が置かれる理由としては二つ挙げられる。

一つ目は、気休め。偽薬効果と言うやつである。

たと言話にすると、こうなる。

村や集落で、立て続けに悪いことが偶然起こった。偶然であるために、特に原因となる物が無い。しかし、人々は不安に思っており、些細なことでも大げさに感じてしまう。大げさに感るから、更に不安に思うの繰り返しの結果、人々の暴発、村や集落の消滅。そんな危険から守るため、聖職者に頼み形だけの祈祷をしてもらい、悪い物を封じ込めたという意味合いを込めて、要石を置くということである。

要するに、不安解消のために目に見える安全を示すもの、として置かれている物と言うことだ。

管理されている物が多いが、このような物なら簡単で、形ばかりの儀式を行い、邪魔にならないところに移動させてしまえばいい。今回の場合、管理もされていないことから、取り除いても何にも問題ないと考えられる。

「問題は、もう一つの可能性が高いことが大きいことかな……」

もう一つの可能性。

気休めではなく、実際に何かが封じられているというものだ。

「魔力が感じられたからといって、一概にそうと決まったわけではないんだが……」

だが、疑いがある以上、調べなくてはならない。いい加減に調べて、後で痛い目にあうのは自分ではなく他の人たちだから。

僕がやると決まったわけではないのに、そんなことを考える。

「……こういうところが、まじめ過ぎって言われていたんだよね……」

こちらに来る前に言われた、友人の言葉をふと思い出す。

「みんなどうしているんだろうな」

多くはないが、それなりにいた友人たちを思い浮かべる。

向こうの世界のことを思い出して、センチメンタルに浸りながらギルドに向かった。

「……といった具合なのですよ」

「なるほど、魔力が感じられる要石ですか。マスターに相談する必要がありますね」

話を受け付けに持っていくと、この反応が返ってきた。

やはり、おおごとになるようだ。

「この場合は、依頼達成と言うことになるんですか？」

とりあえず、一番聞きたいことを聞く。仕事を受けたのに、なかったことにされては、たまらないからな。

「そうですね、達成と言うことで良いですよ。お金は出せませんが、そつだろつな。依頼内容を達成したとは言えないから、納得する。

「それと、この件は、多分あなたに任せることになりそうです」

「はい？」

「あなたが受けた依頼で、問題が発生した。そして、その問題を解決することを頼まれた。ここまでは良いですね」

うん、ここまでは問題ない。

「冒険者の依頼の受け方は、二つあります。一つは、ギルドを通して受ける物。もう一つは、直接人々から受ける物です」

「それは知って……あつ！」

「お気づきになられたようですね。今回の調査は、貴女が直接お受

けになったと判断されることになると思われます」

なんてこつたい。

なんと巧妙な罠。

別に、調べることは苦にはならないが、なんかはめられた感じがどうしてもしてしまう。

レムリア
駄女神の策略なのか？

「」

む、メールだ。

「そんなことありませんよ#」

人の思考を読んだような、メールの内容だ。『#』マークが怒りを表しているのだろう。全く怖くはないがな。

「……どうかなさいましたか？」

他人には、メール音は聞こえないし、メール自体も見ることとは出来ないので、急に黙ってしまった僕を心配したのだろう、受付嬢が訪ねてくる。

「大丈夫です。少し考え事をしていただけです」

「それなら良いのですが……話を戻します。今回の件が、あなたに任せられることになった場合、サポート役の方がつかれるはずですよ」

「下手すればS級依頼になるかもしれない物に、Fランクの人一人ではダメです。安全確実を期するために、最低でもBランク以上の人がつくはずですよ」

当たり前のことか。

「とりあえず、マスターに話して判断を仰ぎます。結果が出次第力ードに連絡を入れますので、今日の所はお引き取りを」

受付嬢にそう言われたので、今日は引き揚げることにした。簡単な依頼を受けても良かったのだが、なんとなく気分が乗らなかったなので、そのまま引き揚げることにしたのだ。

「ちょうどいい時間だし、何か食べてから宿屋に戻るのかな」

今日は何を食べようかな。

「……まさか、焼肉を頼んで、マンガ肉が出てくるとは思わなかった……」

ふらりと立ち寄った食堂でお勧めの焼肉を頼んだのだが、出てきたのはマンガで良くある骨付き肉だった。

確かに焼いてある肉だから焼肉と言えるのだが、女の子に出すような料理じゃないだろ。ナイフとフォークもなく骨を持って直接かぶりつけということから、豪快な男の料理と言った感じ。

「味が良いだけに、余計にたちが悪いよ……」

お勧めと言うだけあって、味はものすごく良かった。絶妙な塩加減と、効果的な香草の使い方で、肉のうまみを最大限に引き出していたのだ。

そのためか、肉だけを食べ過ぎてしまい、ちょっと気分が悪い。

「しばらく肉はいいや……」

とはいっても、この辺では肉料理がほとんどを占めているので、夕食も肉になる可能性はかなり高いのだ。

「効果的な、魚の運搬法を真剣に考えようかな……」

朝、話していた氷漬けにして魚を運ぶという方法。魔法と言うか全てにおいてチートな僕なら、大量に氷漬けできなおかつ持続時間も長い、一般的な魔法使いだとそうはいかないだろう。

「アイテムに頼るとしても、凍らせることのできる物は……」

まず、武器系は却下だな。属性もちはほとんどが伝説級だから当然だ。そんなことに使わずに普通に武器として使った方がいい。

攻撃系のアイテムで、氷系と言うのはあまりない。ほとんどが爆発系、もしくは雷系のものだ。その二つは、使い勝手がいいためそうなっている。

氷系である物と言ったら『アイス・ペトル氷の花弁』くらいだが、値段がそこそこ高いうえ、そう強力なものでない。

「他には……」

頭を悩ませていたが、ふとある物の存在を思い出す。

「あれを使えば、うまくいくかもしれん」

使った事がないので、どれくらい冷えるのか分からないし、値段はお高いが、使い捨てアイテムとは違い、何回も繰り返し使える。長い目で見れば、かなりお得であると言えるかもしれない。

「魔法使いなら、誰でも作れる単純なものだから、手に入りやすい。最悪、僕が作っても問題ない。真剣に考える必要がある」

「このところ、肉ばかりだったので、魚に飢えていることもあり、魚の運搬法について、真剣に考える僕がいた。」

第23話 簡単(?)な依頼の行方(2) (後書き)

誤字、脱字、指摘、感想お待ちしております。

第24話 簡単(?)な依頼の行方(3) (前書き)

遅くなって申し訳ありません

第24話 簡単(?)な依頼の行方(3)

要石について報告した次の日、ギルドから連絡があった。

連絡によると、話し合いの結果、調査は僕に任せる。そして、サポート要員を就けるので、ギルドまで来るようにとのことだった。

特に急ぐこともないので、朝食を取った後、ゆっくりと用意をしてからギルドに向かった。

「初めまして、クラウンと申します」

ギルドに到着し、サポート要員として紹介された男を見て、僕は固まってしまった。

服装自体は普通の冒険者、革の鎧と長剣という、長距離を徒歩で移動することの多い冒険者が良くする動きやすさを重視したものだ。

「道化師？」

何故か、顔に口元は笑っているのに、目の下には涙と言うサーカスのピエロのメイクを施していた。

名前自体も道化師クラウンと言うことから偽名であることが分かる。冒険者で偽名クラウンと言うか、冒険者ネームとして別の名前を使っているやつは珍しくないが、ここまであからさまな物は初めてだ。

「えーっと、クラウンさん」

「クラウンで結構です」

「あー、じゃあ、クラウン。とりあえず、話をしようか。後、話し方も普通でいいよ」

そう僕が言うと、クラウンはニヤリと笑った。

「そうか、じゃあそうさせてもらおう。まずは自己紹介だな、俺の名前はクラウン、冒険者ネームと言うやつだ。ランクはA。このメイクは好きでやっているだけで、特に意味はない」

言いながら見せてくれたカードには、確かにランクAの文字が書かれていた。

「聞いていると思うが、ビリノア・バクスター。ランクはF」

「ああ、今回は面倒なことになったようだな」

「面倒？」

少し手間が掛かると言うだけで、そう面倒とは思わないのだが……
「まあ、調べるだけならば、そう面倒と言うことはない。過去の記録を調べるのも、人に話を聞くのも、特に問題はない。面倒と言うのは、調べた結果何かあった時の対応が面倒と言うことだ」

「と言うと？」

「はつきり言おう。あの要石は邪神の力の欠片が封じられている可能性がある」

邪神の力の欠片とは、その名の通りのものだ。

冒険者―後に勇者と呼ばれるようになる―パーティーが邪神を封じ込める寸前に、邪神が最後のあがきと言うように、己の力の一部を切り離し世界中にばらまいたのだ。

世界中に散らばったそれらは、各地で混乱と被害をまきちらした。邪神のものであるとはいえ、一応は神の力なため、使いようによつてはかなりの恩恵があるのだが、恩恵にあずかったのはごくごく少数で、ほとんどが欲にまみれた人が自分本位で使い、力を暴走させ周りを巻き込んで破滅した。

それでもなお、力を求める人が後を絶たなかったため、欠片の大半は何処か分からない場所に封じられることになった。

「誰にも知られていない封印。良く見ないと分からないほど違和感のない要石。状況はあっているように思える」

状況だけならあっているのかもしれないけど、僕は違うような気がするのだ。

なんというか、昨日要石から感じた魔力は人が発する魔力であつて、邪神とはいえ神の発するものではなかったように感じた。欠片とはいえ神の力だ。人が封じたとしても何らかの形でその力の一端は感じられるだろう。

「それも一理あるが、最悪の想像をして、それに対応することも考えるといいぞ」

「ちゃんと考えてある」

そう言つて、自分専用の武器と持ってきた物を見せる。

「それが対策か？　て言うかそんな棒どつから取り出したんだ？」
手ぶらだったのに、いきなり2メートル近い棒が出てきたのだ。
本当の対策用に持ってきた物より、そちらの方に気が向くのはしょうがないか。

「ん？　名が彫つてあるな。なにに『如意金箍棒』……つて、如意棒か！　なんでお前が……」

レムリア・オンラインで、一番初めに参加したイベントで手に入れた限定10本というユニーク武器だ。

威力は高い方であったが、武器説明に書かれているだけで、伸縮自在と言う特性はなかった。ただの長柄武器の一種として周りからは認知されていった。

なぜ、攻撃力が高いだけの武器が個数制限のあるユニーク武器足り得たのか？

その答えは、武器改造である。

通常、武器改造は10回が限界である。果物ナイフ（攻撃力最低）でもそうだし、クレイモア（剣の中でも高威力）でも同じである。

しかし如意棒は、通常改造できないユニーク武器でありながら、改造が出来、なおかつ通常の二倍の20回の改造が可能となっていた。しかも、長柄武器ではなく特殊武器扱いだったので、武器系の技ならどれでも繰り出せるという特典もあった。

鍛冶師のスキルを駆使して、魔改造をしてメイン武器として最後まで使った愛着のある武器だ。嬉しいことに、現実となった所為か記述でしかなかった伸縮自在という特性が付いていた。改造は出来なくなっていたけど……

「如意棒より、本当の対策の方に注目してほしいんですけど……」

「おお、すまん。珍しい物を見たんでつい、な」

そう言いながら、クラウンは僕が右手に持っている対策に目をやる。

「封魔のビンか……対策としては、あっているとは思うが……」
封魔のビン。その名の通りモノを封印するためのビンである。

見た目は、ただの無色透明なビンの側面に、六芒星が書かれているだけに見える。しかし、実際には透明インクで表面にびっしりと封印呪が書きこまれているものだ。封『魔』となっているが、便宜上そう呼んでいるだけであり、魔人族が使ったとしても何の問題もない。

問題は、このビンを使えば何でも封印できるということだろう。人であろうが、魔獣であろうが文字通り何でも封印できる。無論、容量の関係上封印出来ないというものはあるが、そのことさえなければ何でも封印できると言われている。

「なんつう危険なものを……」

「許可は取ってますよ」

その性能から、このビンは取扱危険物とされており、使うには上——今回は冒険者ギルド——からの許可が必要になる。許可を得ずに使用するのは犯罪とされ、罪に問われる。同時に所持、作成しても犯罪として罪に問われる。

「割らないようにな」

「解っている」

このビンは、無類の封印力を持っていながら衝撃に弱いという性質がある。中からはどんなことをしても壊れないということだが、外部からの衝撃からはとても弱く、ちょっと物がぶつかっただけでも割れてしまう恐れがある。長時間の封印には向かないが、一時的なものなら問題ない。今回は用心のためであり、長期的なものではないためこれをチョイスしてきたのだ。

「対策をしていることは解ったが、まずどうするつもりだ？ 聞き込み捜査でもするのか？ それとも手っ取り早く、魔法を使って直で調べるのか？」

「魔法を使います。聞き込みをしてもいい情報は、入ってこないと思いますし……」

すでに、あの家の前の持ち主は死亡していることは確認済みだ。

その子供は王都に住んでおり、聞き込みに行くのは時間がかかりすぎる。家を建てた建築業者からはすでに話を聞いており、建てる時すでにあったということしかわからなかった。あの辺りで起きた不可解な事件等の話は、すでにギルドが調べ上げており、特に何もなかったという結果が来ている。

「直で調べるのか、手っ取り早くて良いな」

「直接ではないですよ」

そんな無謀なことはいらない。

ポシエツトから、石の欠片を取り出す。

「なんだそれ」

「昨日取ってきた、要石の欠片」

「は？」

困惑するクラウンをよそに、僕はテーブルの上に魔法陣を書いた紙を敷き、その上に石の欠片を置いた。

「さて、なにをするつもりだ？ いや、その前に、要石に傷をつけるとは、どういうことだ！」

「まず、最初の質問の答えは、簡易使い魔仮契約。傷のことに關しては、近所の子どもたちもやっていることだから問題ないと判断した」

前の持ち主が子ども好きだったのか、あの庭は近所の子どもの遊び場だったのだ。そこに在る大きな石に子どもたちが何かしないわけもなく、傷つけたり、削り取ったりということは日常茶飯事だったようだ。

「……まあ、それなら良いけどよ。使い魔契約って事は、石の記憶を直で聞こうってことなんだな」

「仮だからすぐに解約できるし、情報源としては最上級だと思う」
それじゃあ、始めようかな。

第24話 簡単(?)な依頼の行方(3) (後書き)

感想を書いてくれた方に、この場を借りて深くお礼と謝罪を致します。

書いてくださった感想等はすべて目を通しておりますが、返信がで
きずに申し訳ありませんでした。

手厳しい意見もありましたが、すべて作品の糧となるものであり、
ありがたいと感じられるものです。

引き続き、誤字、脱字、指摘、感想お待ちしております。

質問のあった透過の術(6話)について。

無意識下で行っている術のため、寝ていても発動しています。

専用寝台は、神人の本能によつて、これがなんとなくいいというだ
けであつて、普通の寝台でも寝れます。羽があつて云々というのは、
ピリノアの勘違いに起因するものです。

第25話 簡単(?)な依頼の行方(4) (前書き)

終わらないうえに短いです。

第25話 簡単(?)な依頼の行方(4)

簡易使い魔仮契約―術者の血(一滴で大丈夫)を混ぜたインクで書かれた魔法陣の上に使い魔としたいモノ(動物、植物、無機物等、何でも構わない)をのせて呪文を唱えるだけという、お手軽なものである。

しかも、仮契約なので、呪文は必要ない。ただ、魔力を流せばいいだけである。

「という訳で、魔力注入♪」

「軽いな、おい」

実は、結構楽しみなのである。

使い魔契約というものは、ゲームにはなかった物なのだ。

つまり、この世界独自のもの。廃人だった、僕がやった事がないことなのである。

やった事のないことに挑戦する、これでわくわくしなければ男じゃない……今は女だけでも……

「上がった下がったりと、忙しい奴だな。で、これはどんなふうになるんだ？」

クラウンが、契約陣を指さして尋ねてくる。

簡易とはいえ、契約には少し時間がかかるため、話すことは出来る。

「さあ？」

「さあ……つて、お前……」

やるにあたって調べたのだが、動物の場合は簡単で、元となった動物の姿になる。体の大きさや、色などが変わることがあるが、基本そんなに変わらない。

植物の場合は、擬人化、動物化する……とは言っても、リアルなものではなく、某未来的ネコ型ロボットの映画(第28作目)のような感じになる。

無機物の場合は、様々である。完全に人型になったり、おもちゃの動物のようになりたり、そのままの状態であつたりと色々で、統一性も関連性もなくバラバラである。

「という訳で、今回は無機物だから、何になるかは判らない」

「そうか。ま、意思疎通が出来れば何でもいいけどよ。……ん？
そうだ」

クラウンが、ふと思ひ出したというように切り出してくる。

……結構時間がかかるな……

「使い魔つてのは、どういう役目を果たすんだ？」

「基本的に、主の護衛。後は、秘薬の材料や、貴重な鉱石などを取
つてくるとか」

伝言の伝達とかにも使われたり、身の回りの世話をさせたりとい
うのもある。

「んゝ便利そうだな。魔術師でない奴でも、持つことは可能なのか
？」

「不可能じゃない」

魔力を持っている人――この世界の人の大半は持っている――ならだ
れでも使い魔を持つことは可能なのだ。

「ただ、燃費が悪い」

一般の人の魔力なら、最低ランクの使い魔でも魔力が半分ほど持
つてかれるのだ。

ちなみに、最低ランクの使い魔は、ネズミなどの小動物型だ。動物
型は、燃費が良いのだ。理由としては、食物から魔力の供給が出来
るため、主人の負担を減らすことが出来るのだ。続いて植物方も燃
費が良いと言える。土と水と日光さえあればいいのだが、動かした
りするのには、土から出なくてはならず土からの栄養がなくなると、
途端に魔力供給量が増えてしまう。一番燃費の悪いのが、無機物型。
主人からの魔力供給に頼るしかないのだが、他の方と比べると強力
なものになることが多いのだ。

「元にする物など他の要因もあるし、一概には言えないけど、大体

こんなものだという話だよ」

「へー。じゃあ、冒険者があまり使い魔を持ってないのも……」

「常に魔力を削られているわけですし、伝達もカードを使えば出来るのですから……」

「必要性をあまり感じないってところか」

そう言うことだ。

それにしても……

「長いな」

「ん？ 何がだ？」

「時間。後、注入している魔力量も多い」

簡易で仮なので、本来ここまで時間と魔力を食うはずがない。大物ならともかく、今回は石の欠片だ。そんなに力のある物じゃあ……

「……そうか、その可能性があったか……」

「ん？ なんの……」

僕の言葉に、クラウンが疑問を投げかけようとしてくるが、その前に“ぼうん”という気の抜けた音とともに、陣の上に置かれていた石が煙に包まれる。

その煙は、しばらく陣の上にとどまっていたが、すぐに引いて行った。

「汝らか？ 妾を呼び出したのは？」

引いた後にいたのは、体長十センチくらいの少女だった。

長いストレートの金髪、つり目がちの青色の瞳。凹凸のない体形で、偉そうに腕を組んでいる状態は、彼女の子どもっぽさをさらに増長させている。

「おお、なんだ、この少女は？」

「無礼者……！」

「ぐはっ」

少女がクラウンに手を向けると、どこからともなく野球ボール大の石が頭に直撃する。

「妾を呼びだしたのは、汝か？」

イスから転げ落ちたクラウンを、見向きもせずに僕に問いかけてくる。

「ああ」

「ふむ。なれば、汝が妾の主ということかの」

「ま、仮だけどね」

「ん？ 仮であろうとなかろうと関係ないぞ。妾には汝に従う義務がある。契約とはそういうもののなのじゃよ」

そついう認識なのか。

「なら遠慮なく。今回は、少し訊きたいことがあって呼び出したんだ」

「訊きたいことか？ 妾のわかる範囲でなら答えてやろう」

「ありがとうございます。では……」

「さて、お前ら……」

サクサクと話を進めようとすると、テーブルの下から声が聞こえてきた。

「ん？ おお！」

テーブルの下をのぞくと、そこには頭から血を流してこちらを見ながら倒れているクラウンがいた。

「覗きかのう」

「てめえがやつたんだろうが……！」

いつの間にか僕の肩の上にいた幼女の言葉に反応して、クラウンは立ち上がって絶叫した。どうでもいいけど、血がどくどく出ているが大丈夫なのだろうか？

「いきなり石をぶつけるとは、なにしてくれるんだこのガキ！」

「おぬしが失礼なことを言ったからじゃ」

「それでも、いきなり石はねーだろ」

「妾の身体じゃ叩いたところでダメージは与えられんからな」

「だけど……」

「なに……」

「……」

「……」

だんだん言い争いがうるさく、低レベルになってきた。ギルド併設の酒場という場所だったため、周りにいた冒険者からヤジや煽る声も聞かれる。どうやら賭けも始まったらしい。

「そろそろ止めるか」

まず用意するのは鏡。

鏡を見ながら、半眼を作る。一步間違えると眠たそうに見えてしまっ
うから注意。

納得がいく半眼になったら、そこから見える瞳のハイライトを消す。成功。

口元に笑みを作って、顔の完成。

続いて、手の上に魔法球を作り出す。普通の魔法球のほんの十倍ほどの魔力を込める。そのままだと大きくなりすぎるので、普通の魔法球位まで圧縮、ついでに雷の属性を着ける。

「だか、ら……」

「な、に……」

何かに気付いたように、二人がこちらを向く。

「……（汗）」

「……（汗）」

冷や汗をかきながら黙りこむ二人に対して、有名なあのセリフを口にする。

「すこし、頭冷やそっか」

「「ぎゃーーーーー」」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1595t/>

レムリア・オンライン

2011年11月5日00時09分発行